
起きたら異世界でした。

一ノ瀬 崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起きたら異世界でした。

【Nコード】

N5486X

【作者名】

一ノ瀬 崇

【あらすじ】

特技は現実逃避、趣味は日向ぼっこ、好きなタイプは小さな女の子。そんな僕、片桐悠里が異世界で繰り広げる剣と魔法と幼女のファンタジー。や、知らない内にトリップしてたけどね。

知らない間に異世界トリップ。

まず感じたのは、全身の気だるさ。続いて何か僕へと向けている視線に気付く。

微睡む意識を強引に浮上させ、薄く開いた僕の目に飛び込んできたのは

「……………あ、やっと起きた」

見知らぬ、幼女だった。

肩口まで伸びた紫銀の髪と、青紫の瞳が印象的な幼女。顔立ちも整っていて、数年も経てば誰もが振り返る美少女になるだろう。

麻布で編まれたゆったりとしたチュニツクとやや煤けた茶色のズボンを着ていて、何処となく漂う異国情緒が幼女のかわいさを引き立てている。

そんな美幼女が、僕の顔を覗き込んでいた。この娘は誰だろう？というか僕の部屋にどうやって入ったんだ？

そんな疑念が頭の中を駆け回り、質問として外へ出ようとするが、

「……………!!」

声が、出ない。

今気付いたが口も喉もカラカラだった。

ぱくぱくと口を動かす僕を見て、幼女は首を傾げる。

かわいい。じゃなくて、水、水をください。

僕の思いが伝わったのか、幼女はにこりと微笑む。

幼女は僕の寝ているベッドから離れて、部屋の左の方へ歩いていく。自然とその姿を目で追っていたが、上体を起こそうとした所で、

「……………っ、あっ！」

背中が焼けるように痛み、ぐぐもった声を上げてしまう。

僕の声に驚いたのか、幼女が振り向く気配がする。

「あっ、まだ動いちゃダメだよ！」

幼子特有の甘く高い声に押し留められる。

僕は体を起こすのを諦め、ベッドに深く沈み込むように力を抜く。

右の肩甲骨から腰にかけてじくじくとした痛みが広がっている。

幼女は僕が無理に起き上がろうとしない事を確認すると、ドアを開け部屋を出て行った。

幸い首は動かせるようなので、目で幼女を見送る。

徐々に遠ざかる足音をBGMに、僕は深く息を吐き出した。

何だろう、この背中の痛みは。怪我をした覚えは無いんだけど

……………。それよりあの娘は一体？

そこまで考えた所で、僕は気付いた。

って、この部屋、僕の部屋じゃない？

混乱する僕の元へ、足音が近付いてくる。

行きと違い、足音は2つ。ドアがゆっくりと開かれ、先程の幼女が水差しとコップを抱えてやってきた。

その後ろから、もう1人が姿を見せる。

幼女と同じ紫銀の髪と青紫の瞳。恐らくは幼女の姉だろう。幼女よりもやや長い髪を頭の左で結んでいる。

ああ、何て言うんだっけか。サイドポニー？

整った顔立ちは正しく美少女と言って差し支えない。

薄い青のローブに身を包んでおり、ゲームに出てくる修道女みたいな格好をしている。

何より目を引くのは彼女が手にした古びた杖。

一体何に使ったんだろうか？

と、幼女がコップを差し出していたのに気付く。

ありがとう、と心の中で感謝しつつ受け取ろうと手を伸ばそうとして、

あ、あれ？

幾ら力を入れても腕が持ち上がらない。と、僕の体が動かない事を察したのか、幼女はコップを引っ込める。

そして幼女は水を自分の口に含むと、

「んう」

「んむっ！？むっ、んくっ、んくっ」

口移しで飲まされた。部屋の入り口の方で少女が何やら衝撃を受けているみたいだが、僕はそれどころじゃない。

口や喉を潤していく水に混じって、甘い香りが鼻へ抜ける。

反射的に舌を伸ばし更に水分を求めると、舌先に温かく柔らかな感触が生まれる。

舌で押せば絡まるようにうねり、逆に引けばおずおずと求めてくる。夢中でそれを吸っている、幼女がゆっくりと唇を離す。

互いの舌を繋ぐ銀色の糸を見て、自分が今何をしていたのか気付いた。

「ちょ、ちょっ！？僕今この娘とティープなチツスを……！？」

顔を真っ赤にする僕を、頬をほんのり桜色に染めながら幼女が見つめ返す。

幼女は目を少し潤ませながら上目使いで、

「おかわり、いる……？」

「な……何してるのよミナあ！？」

思わず頷き掛けた瞬間、少女が叫ぶように声を上げた。

「だってお兄ちゃん、体動かないみたいだから」

「それにしたって、く、口移しは無いですよ！？」

「でも喜んでたよ？」

待ちなさいお嬢さん。その発言はいろいろと危険です。

尚も口論を続ける2人を何とか宥めるべく、僕は口を開いた。

「えっと……取り敢えず2人共、落ち着いて」

「これが落ち着いていられますかっ！」

少女にあっさり一蹴された。
しかしここでめげる訳にはいかない。
心を強く持って再度声をかける。

「ほら、彼女も悪気が有った訳じゃないし、むしろ親切心というか
献身的なアレで」

「だとしても方法に問題が有りすぎますっ!」

むう、なかなか手強い。

ここは幼女のした事を好意的に受け止めている、という所をアピールしてみよう。

「ぼ、僕はそんな、嫌じゃなかったから大丈夫」

「それはそれで問題です!」

ぐっ、確かにそうだ。言葉の選択を誤ったかな。

……な、なんだよう、ロリコンじゃないぞ!……多分。

その後も何とか説得を続け、漸く少女が落ち着いたのが10分後。
ベッドから起き上がれない僕の横で、丸椅子を持ってきて座り足を
ぶらぶらさせている幼女。その正面の椅子に少女が座る。

「……失礼しました。私はこの教会の修道女でシーナと申します」

そう言って少女　シーナは頭を下げる。

やっぱりシスターだったのか。というかこの建物は教会だったのか。シーナの落ち着いた声は何処か透き通っていて、賛美歌を歌ったらきっと天使の歌声なんて言われるくらいに聴いていて心地良い。

「私はミナだよ。修道女見習いなんだ」

幼女は僕の右手に指を絡めてにつこりと微笑む。

……ヤヴァイくらいにかわいい。というか、僕の人差し指を優しくきゅっと握るのは反則だと思えます。

ちよっとドキッとした胸を落ち着かせつつ、僕は口を開いた。

「僕は悠里。片桐悠里。カタギリが姓で、ユーリが名前だよ」

僕の名前を聞いて、シーナが驚いた風に口元へ手をやる。

何か変な事言ったかな？

2人の名前が外国人風だったから、一応姓と名を言ってみただけど。

もしかしたらシーナは椎奈でミナは美奈という日本人でした的な才子だったり？

うっわ、僕超赤っ恥じゃん。

みたいな事を考えていると、恐る恐るといった様子でシーナが切り出した。

「あの……カタギリ様は、貴族なのでしょうか？」

「へ？」

言われた意味は解つても、言われた経緯が解らない。
僕の何処を見て貴族だなんて思ったんだろう。

「僕は貴族じゃないよ、ただの平民。だから普通にユーリ、って呼んでくれればいいよ。……でも何で僕を貴族だと思ったの？」

貴族じゃない、という言葉を受けてシーナはほっと息を吐く。

「この国では、姓を持つ方は皆貴族ですので……。」
「そっかぁ。……ん、この国？」

あれ、何か今変な事を聞いた気がする。

この国、ってシーナ言ったよね。

何処かで、こんな感じの状況下で、こんな感じの台詞を聞いた事が有ったような……あ、ああ、思い出した。

確か異世界に召還された主人公が魔王を倒すRPGの出だしにこんなやり取りが有った筈だ。

はっはっは、成程なるほど。

つまりここは異世界で僕はトリップした訳か。

「うわぁ……マジかぁ……」

いきなりテンションが落ちの僕を見て慌てるシーナ。

「あつ、あのつ、私何か失礼な事を!？」

「いや、うん、大丈夫。ちよつと現実逃避してるだけだから」

気に掛ける余裕も無いのでシーナを適当にあしらいつつ、深い溜息を吐く。

状況を鑑みるに、80%の確率で僕は異世界トリップしたとみている。

まだ決定的な証拠を目にしていない事や、自分の感情を含めて20%くらいはまだここを地球 更に言えば日本だと考えている。

だって異世界トリップものの定めとして、元の世界に帰れないのは定石。運良く帰れる手段が有るとしても、どうせすぐには帰れない。そんなショッキングな出来事をすんなり受け入れるには、少々心のHPが足りない。

まだ救いが有るのは、そこまで元の世界 地球に未練が無い事、かな。

僕に家族が居ない。正確には、家族を失ったばかり。

今年の正月に両親と妹を事故で亡くし、祖父に引き取られて、やつと両親と妹の死に自分の中で区切りを付けたのが2ヶ月前。

小さい頃から祖父とは付き合いが有ったけど、僕の方に照れや遠慮が有って今一つ打ち解けられていなかった。

だから祖父の事はそこまで心残りじゃない。

……いや、感謝はしてるよ?でも、ちよつと薄情かもしれないけれど、そんな簡単に割り切れるものでもないし。って僕は誰に言い訳してるんだ?

程良い感じにパニックっていると、ふわりと柔らかい感触が僕を包んだ。

視線を上げると、ミナが僕の頭を抱えるように抱き締めていた。

「……ミナ？」

「だいじょぶだいじょぶ。私がいるからさみしくないよ？」

ね？と笑い掛けるミナ。

小さな手で頭を撫でられる度、少しずつ自分が冷静になっていくのが解った。

「私が泣きそうな時はお姉ちゃんがこうしてくれるの。ユーリ、今悲しい顔してるから、私が撫でてあげるね」

ミナに言われて初めて気付いた。

僕はミナが心配する程、悲しい顔してたのか。

いけないいけない、こんなに小さな娘に心配掛けてるような奴は男じゃない。

祖父に教わった教訓を思い出して、ネガティブな思考を追い出す。頭が冷えると、幼女特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。そして僕の顔に当たるこのふにふにとした触感の間違いなくちつぱい。

あれ、ひよっとしてここ異世界じゃなくて天国じゃ？

ポジティブ気分で現実を見据えると、目の前には幼女の胸。横目でちらりとシーナの位置を確認。

よし、この角度なら見えない筈。

僕は意を決して息を吐き出し、

「クンカクンカスーハースーハー……」

うん、堪能した。

大丈夫、再度確認したけどシーナは全く気付いてない。え、ロリコン？それがどうした！

先程とはまた違ったベクトルで思考を暴走させる僕。と、何やら視線を感じる。

目を上げると、ミナが軽く頬を染めて僕を見ていた。そして僕の耳に口を近付けると、囁くように言った。

「……ユーリの、えっち」

はい、すいません。もう色んな意味でクリティカルです。思わずミナを押し倒そうとして、

「っあ!？」

背中に激痛が走る。

ミナの色香にすっかり惑わされていたが、僕は怪我人だったのだ。怪我をした経緯は知らないけどさ。

僕の悲鳴に2人が慌てる。

「ユーリ、だいじょぶ!？」

「ミナ、どいて!ユーリさん、今治療しますから!」

幸いにも強烈な痛みは一瞬で引いている。だからこそ、シーナが何をしようとしたのかを見れた。
シーナは古びた杖の先を僕へ向けると、流れる水のような声で何かを唱え始めた。

「生命の息吹よ、彼の者の傷を癒せ、ライブ！」

シーナの声に合わせて小さな光の粒子が杖の先に集まり、拳大の大きさまで膨れ上がる。すると光は弾け飛び、雪のように僕の体へ降り注いだ。

暖かい光が僕の体の中に染み込むように融けていく。

その光景に呆然としていたら、急に背中に違和感が走った。

もぞもぞとした妙な感覚。例えるなら背中の皮膚が意志を持って這い回っているような。

その気色悪さに思わず身を振る。

しまった、と思った時にはもう遅く激痛が背中を走……アレ？

「痛く……ない？」

背中のもぞもぞもすぐに収まり、全身が気だるい以外に体の異常は感じられない。

試しに体を起こしてみる。力が入りにくい以外は特に異常も無かった。

そんな僕の様子を見てシーナは満足そうに笑みを浮かべる。

「良かった、成功ですね」

「成功って……今何したの？」

僕の疑問に、笑顔で答える。

「ライブの魔法を掛けたんです。失った血は戻らないのでだるさは残りますが、傷は塞がったハズですよ」

異世界トリップもののお約束が出た。

魔法かあ。魔法って、魔法だよなあ。

意味の解らない事を考えながら、僕は諦めて状況を整理する事にした。

どうやらここは本当に異世界みたいだ。

あの魔法も、光だけなら手品みたいにトリックがあるのかもしれない。でもさっきまで有った背中 of 激痛が、あの光を受けてから全く無くなった事の説明が付かない。

だからアレは魔法だと信じよう。

まず大前提として 地球には魔法は無い。

そしてこの世界には魔法が有る。

結論 ここは地球じゃないよ。

「……うん、完璧な理論だ」
「どしたの、ユーリ？」

首を傾げて僕を見るミナ。

うん、その表情は止めようね？かわいすぎて僕が壊れるから。
自己主張を始めようとするマイサンを気力で押し留めながら、どうしたもんかと天井を見上げる。

取り敢えず住む所を探さないといけない。

どこか宿屋みたいなのがあれば良いんだけど。そうなるとお金も必要だなあ。この世界にギルドみたいな施設は有るかな？

ぼんやりと考えていると、部屋の外から大きな音が響く。

『ゴーン……ゴーン……！』

「うわっ、な、何？」

「来客を知らせる鐘ですよ。私は少し席を外しますから、何か有ればミナに言い付けて下さいね」

鐘の音に驚いている間にシーナは部屋を出て行った。

これからの事とか魔法の事とかいろいろ話したかったんだけどなあ、とぼーっとしていたら、ほっぺをぶにつとつつかれた。

そのままほっぺを掴まれたり、おでこをぺちぺち叩かれたり。

「えっと、ミナは何をしてるのかな？」

「ん〜、なんでもないよ」

尚もぺたぺた触ってくるミナ。
どことなくご機嫌な様子で纏わり付いてくる姿は子猫っぽくてかわいいい。
やられっぱなしだと負けた気がするから、両腕に無理やり力を込めてむぎゅっと抱き寄せる。勿論ミナが痛くならないように上手く加減して。

「ふわっ！？え、えと、ユーリ？」

そのまま腕力で小さな体を持ち上げ、僕の上に寝かせる。
ミナは戸惑っているけど暴れたりはしないで大人しくしてる。と、

「…………ふわ〜あ」

寝転がった所で急に睡魔が襲ってきた。
ミナを抱き上げた事で予想以上に体力を消耗したらしい。
目を閉じると意識がすぐに薄くなり、僕は夢の中へと入っていった。

こうして、いろいろ現実逃避したまま僕の異世界トリップ初日は終了した。

恩人はエルフでした。

僕がこの世界に来てから3日。

その間にシーナとミナからこの世界の知識や常識、それから僕が現れた時の事を教えてもらった。

まずは今僕が居るこの場所について。

ここは《西の大陸》って大陸の南西部に在る《リンディア王国》って国の更に南西部、森林地帯の入り口に在る《タマタ村》っていう小さな村。

村人達は主に農業や放牧、狩りなんかで生計を立てている。

村にある一番大きな建物がこの教会で、診療所や集会所みたいな役割も持っているらしい。

つい最近神父さんが亡くなって、代わりにシーナが村人達に支えられながら教会の仕事をこなしているみたい。

それと週に一度、行商人の一行がやってきて、村で穫れた野菜や動物の皮と、街で売っている日用品や食材なんかを売り買いしてる。

行商人の馬車やシーナの話聞く限り、この世界の文化レベルはまだ低い。

産業革命以前のまま停滞しているみたいだ。

その理由は魔法が有る所為だと思う。

多分だけど、魔法の技術を発展させようとすると、科学の技術は成長していかないのだろう。

魔法かぁ。やっぱりまだ現実感が無いなぁ。

聞いて驚いたのは、この世界の人は大なり小なり皆魔力を持っているという事。

その魔力が多い人は、魔導師になる為に国が運営する学校へ行く。優秀な人材を集める為に入学金や生活費は国持ちらしい。シーナも学校に入っていたのか聞くと「私みたいに魔力が少ない人は入れませんよ」と笑って言われた。

僕の傷を治したくらいだから、きっと大魔導師なんじゃないかって思った、と伝えたらちよつと照れてた。

詳しく聞くと、シーナの杖に秘密があった。

あの杖は神父さんが使っていたもので、大怪我でも治療出来る《ライブ》の魔法が込められたものだったんだ。

魔法を使うにはそれぞれの魔法が込められた杖や魔導書が必要で、治癒系の魔法が込められた杖は比較的高価な物らしい。

そんな貴重な物を僕に使って良かったのか、って聞いたらシーナは困ったように笑いながら答えた。

「ミナの命の恩人を放つては置けませんよ」

そこから、話は僕が現れた時の事に飛んだ。

事の始まりは3日前の朝。

ミナが1人で薬草を取りに近くの森へ入っていった。

この時期には珍しく大ぶりの薬草がいっぱい生えてて、取るのに夢中になる余り普段は立ち入らない森の奥へ進んでしまった。

昼近くになり、さあ帰ろうかと歩き出した所で《荒熊》に遭遇してしまった。

荒熊は文字通り熊なのだが、気性が荒く鋭い爪で獲物を切り刻んでから食べるという、残忍極まりない習性があるらしい。

恐怖で動けなくなったミナに荒熊が近付き、腕を振りかぶる。

ぎゅっと目を瞑るが、痛みの代わりにやってきたのは優しく包み込むような感触。

目を開けると、僕がミナを抱きかかえるようにして、荒熊の攻撃を防いでいたらしい。

荒熊は駆け付けた狩人に退治され、意識の無い僕はそのまま教会へ運び込まれた、という訳。自分でも知らない間に、僕は村のちよつとした英雄になってた。

ミナは命を助けてくれた 結果的にそうだった 僕に好意を持ったようで、甲斐甲斐しく身の回りの世話を焼いてくれた。

まあ、荒熊に襲われた時の恐怖が、そのまま僕へのドキドキにすり替わったんだらうなあ、って思う。

吊り橋効果だっけ？

そんな訳でミナに介護されて、やっとベッドから出ても大丈夫とシーナに言われたのが今朝。

なんだかんだですっかり鈍ってしまった体に喝を入れようと、教会の庭で軽くストレッチを始めた所で現在に至る。

朝の日差しが目に滲みるなあ、とぼやきながら両腕を上には伸ばす。ボキボキと療養生活で凝り固まった肩や背骨が音を立てた。

その音に混じって、背後から草を踏む音が聞こえる。

「いやはや、凄い音だね。おはよう、ユーリ君。もう起き上がっても平気なのかい？」

掛けられた声は、女性にしては低めだけど、つい耳を傾けなくなる

ような綺麗な声。

僕は振り返って声の主に笑顔を向けた。

「おはようございます、エアリイさん。もう怪我は完治したんですけど、流石に体が鈍っちゃいまして」

目の前に立つ女性はエアリイさん。

荒熊を退治し、僕を教会まで運んでくれた恩人の狩人さんだ。

身長は僕と同じ160cmくらいで、すごい美人なおトナの女性。切れ長の緑色の目と薄い金の長髪がとてもチャーミングだ。

何より目を引くのは、ピコピコと揺れる長い耳。

そう、エアリイさんはエルフなんだ！

いやあ、まさか本物のエルフを見られるとは思ってなかったから、最初にエアリイさんを見た時は衝撃だったね。思わず「その耳触っても良いですか!？」って聞いちゃったし。

あの時は顔を赤くしたエアリイさんに断られちゃったけどね。

「元気なのは良いけど、余り無理はしないようにね。あれだけの怪我をした後というのは、存外動けないものだから」

「あはは、解ってますよ。今日は精々散歩くらいにしておくつもりでしたから」

「それじゃあ散歩が終わったら、私の家に寄ってくれ。何も無いがお茶くらいならだすよ」

そう言って微笑むエアリイさん。

その姿は近所の優しくて美人なお姉さんって感じた。

今日も森へ入るのだろう、ゲームとかで狩人やアーチャーが着てそうな グリンサーコート？を纏い、背中には木で出来た弓と矢筒を背負っている。

ただ、僕の視線が向かうのはコートの盛り上がった部分。

エアリーさんはスレンダーな体型をしてて全体的には華奢なんだけど、胸元はしっかり女性らしさをアピールしてる。

あれは間違い無くはある！

と、僕の視線を感じ取ったのかエアリーさんは胸を隠すように腕を抱き、身を振りながら頬を赤く染めた。

「私も元気なのは良いと言ったが……あんまり見られると恥ずかしいものだよ？」

僕の理性はダメージを受けた！

いや、エアリーさん、それ反則です。かわいすぎです。

雰囲気はオトナの女性なのに、こついつたちよつとした仕草が、どこことなく子供っぽくてかわいい。

屈託無く笑った時なんか、僕と同じ年 14、5歳の女の子にか見えない。

前にお見舞いに来てくれた時のワンピース姿は永久保存版だった。

あ、思い出したら鼻血出そう。

反射的に鼻へ手を伸ばす。勿論鼻血は出ていない。

「……ふふっ、まあそれだけ元気なら心配はいらないか」

僕の動きが面白かったのか、エアリーさんが笑みを零す。

思わずぼーっと見ていると、

「ん、どうしたんだい？」

「笑ったエアリイさんが素敵だったので見惚れてました」

……ハッ！？僕は今何を口走ったんだ！？

上がりっぱなしのテンションに任せてとんでもない事を言ったような気がする。

見ればエアリイさんは顔を真っ赤にして俯き、ぷるぷると肩を震わせていた。

うっわぁ、エアリイさんマジ切れ状態？一体何を喋ったんだ僕！？

軽くパニックになっている僕をキッと見据えて、エアリイさんは腰に手を当て怒るように言った。

「そっ、そういう事は余り軽々しく言わないでくれないか？」

「は、はいっ！もう言いません！」

「いや、たまにというか、言うならもっとうん囲気の有る所で……」

最後の方は声が小さくなって聞こえなかったけど、取り敢えずエアリイさんが怒ってるのだけは解った。

もうテンションに任せて喋るのは止めよう、うん。

「それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

「はい、あ、エアリイさん」

うん？と軽く首を傾げて僕を見る。やっぱりかわいいなあ。

恩人の無事と狩りの成功を願って、僕は自分出来る100%の笑顔で言った。

「行ってらっしゃい」

「ああ、行ってきます」

僕の言葉にきよとんとしたエアリイさんだけど、花が咲いたような素敵な笑顔を返してくれた。

エアリイさんを見送ってから、僕は一通りの軽い運動を始めた。目測50mダッシュや腕立て伏せ、スクワットなんかは少しキツかった。

筋トレって1日サボっただけでキツくなるけど、3日も寝転がっていたらここまでキツくなるのか。

額に汗を掻きながら、大きく深呼吸する。

吹き抜ける風が気持ちいい。

一息吐いて、僕は庭に生えている大きな木の根元に腰を下ろした。右手を伸ばし、隣に置いてある麻袋を掴む。

「はてさて、一体何が入っているやら」

実はこの袋、僕が肩に引つ掛けていた物らしい。
少なくとも僕はこの袋を見たのは今朝が初めてだ。そう言えば、と
シーナが僕の替えの服を調達してきてくれた際に、思い出して持っ
てきた物だ。

見た目の割には随分と軽く感じるので、あんまり中身は入っていない
んじゃないかと思う。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

ちよっぴりドキドキしながら麻袋に手を突っ込んだ瞬間、

「ユーリっ」

「わひゃあっ!?!」

突然掛けられた声と背中にぶつかると感じる感覚に、妙ちくりんな悲鳴を上
げてしまう。

そのまま僕の肩に手を回してきゅっと抱き付いてくる。むむっ、こ
の甘い香りは

「ミナ、脅かさないでよ」

「にへへ、ゴメンね」

ていつ、とミナの体を持ち上げて僕の膝の上に乗せる。

背面座……げふんげふん。

頭をくしくしと撫でると、ミナは嬉しそうに目を細める。

と、僕の左手が入っている麻袋に目が行ったようだ。

「気になる？」

「うん、ユーリが何を持ってきたか点検しようよ」

「じゃあ一緒に見てみようか」

左手を突っ込んだまま袋ごと持ち上げ、ミナの前に置く。
袋の口を開け、中の物を取り出す。

「これは……折り畳み傘？」

取り敢えず足元に置いて他の物を取り出す。

次に出て来たのはなんとみかんの缶詰め。

更に手を突っ込むと栓抜きが付いた缶切りが見つかった。

その後も出るわ出るわ、折り畳み傘3つ、缶切り1つ、みかんの缶詰め5個、白桃の缶詰め3個、釣り糸50mが4つ、ガムテープ2つ、お土産の木刀1振り、2L入る水筒が2つ、招き猫の貯金箱が1つ、手動発電式の懐中電灯が2つ、露天商で売ってそうなアクセサリーが幾つか、他にも大量に出て来た。

最初はミナも物珍しい品に多様な反応を見せていたけど、流石にこの量を前に黙り込んでしまった。

僕も疲れやら呆れやらで、この四次元ポケットみたいな麻袋に手を突っ込むのを止めた。

多分、まだ何か入ってる。だって袋を振ったら中でガサゴソいってるもん。

「ふわぁ……すごいね、これ」

「取り敢えず手分けして倉庫に持って行こっか」

目的の倉庫は教会の隣に建っている。

ちよつと寂れた木造2階建てで、1階は壊れた家具なんかを置いてある所謂粗大ゴミ置き場。2階が余り使わない雑貨なんかを保管する場所。

たまに掃除しているのか、埃が積もっていない階段を2人で登っていく。

大半のガラクタを整理して倉庫に納め、やっと片付いたのは昼近くだった。

ふう、と一息吐いているとミナが一点を見続けているのに気付いた。その視線を辿ってみると、無造作に置かれたアクセサリーの山があった。

やっぱり女の子だなあ。

なんとなく微笑ましく思い、僕は右手を麻袋に突っ込んだ。

目的の物を思い浮かべて右手を引き抜くと、想像してたのよりちよつぱりオシャレな物が指の間に挟まれていた。

手のひらに隠しながら、僕はミナに声を掛ける。

「ねえミナ、ちよつとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

要領を得ない僕の言葉に首を傾げながらも、ミナは要求通りに動いてくれた。

ちっちゃなミナの手を両手で優しく包み込み、そつと、それを挿し込む。

「ん。ミナ、もう目を開けていいよ」

少しの不安と沢山の期待が混じった表情で目を開くミナ。
そして左手の中指に光るそれを見て、顔を輝かせた。

「わぁ……!!」

ミナの左手に光るのは銀の指輪。

薦が絡まり合う装飾が施されていて、控え目ながらも気品のあるデザインだ。

ちなみに何故かサイズはぴったりだった。

「ありがとう、ユーリでも、こんなに立派なの私がもらっていいの?」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないとね」

そう言ってミナは、屈んだままの僕に照れたような笑顔を見せた。
お返しなんていいのに、って言おうとした僕の口が塞がれる。
頭の後ろと背中に腕を回して僕が逃げられないようホールドしながら、ミナは小鳥が餌を啄むように僕に唇を押し付けた。

「んっ、んちゅ、ちゅっ、はむう、ちゅ、ユーリ、んっ、しゅきい、ちゅっ」

動けない僕を貪るように情熱的なキスをするミナ。

小さな舌が僕の口内を弄り、唾液を舐めとっていく。

んくんく、と白い喉を鳴らして僕の唾液を飲み込む姿に理性が焼き切れそうになる。

僕の唾液を飲み干したミナが一息吐くと、今度はミナの唾液が僕に流れ込んできた。

鼻へ抜ける甘い香りに脳を揺さぶられた。

体が熱い。

今僕にキスをしている、この少女が欲しい。

そんな衝動に突き動かされ、僕は抱きかかえるように腕を回す。急に動かれ驚いたのか、ミナの体が硬直する。

僕はミナが動かないのをいい事に、舌で彼女の口内を蹂躪する。

夢中で舌を伸ばし唾液を舐めとっていると、舌先がミナの舌に触れる。

「んむっ、ふむうっ!?んっ、んくっ、んふううっ」

ミナの舌に触れる度、奥からじゅぷつと蜜が溢れる。

溜まった唾液ごと柔らかく小さな舌を吸ってみる。

幼い体がびくんびくんと軽く跳ね、ミナは力無く僕に凭れ掛かった。息が苦しくなつて口を離す。

僕とミナを繋ぐ銀色の糸が服に落ち、妖しく輝いていた。

「んああ……っ ユーリい、しゅきい……」

僕の腕の中でとろけた笑みを浮かべるミナ。

ミナの胸の小さな突起が、服を押し上げていた。

それを摘もうと僕は手を伸ばし

『ガラーン……！ガラーン……！』

突如鳴り響いた鐘の音に、僕もミナもびくうっ！と身を震わせる。

一瞬、誰か来たのかと思っただけどすぐに思い当たる。

あれは正午の鐘の音だ。

来客用の鐘は建物の中には良く響くけど、教会の隣に併設されているこの倉庫までは音が届かない。

それに若干音色も違う。

「……あは」

びっくりした反動か、どちらともなく笑い声が漏れた。

もうさっきのピンク色な雰囲気は無い。

ちよっと惜しかったかな？と思いつながら、僕はミナに右手を差し出した。

「それじゃあ、お昼ご飯を食べに戻ろうか」

「うん、戻ろう」

純真な笑顔で僕を見上げたミナ。

手を繋いで倉庫を後にする。

と、教会の入り口まで来た所でミナは手を離れた。

数歩先に行くところと振り返り、僕にだけ聞こえる声で言った。

「……また、しようね」

頬を赤く染めて教会の中へ駆けて行く。

残された僕は顔を真っ赤にしながら、ゆっくりとその後を追った。

だから待つんだ息子よ。君の出番はまだまだ先なんだから。

いや、まあ、ミナとキスしてた時は、僕のズボンに五重塔が建ってたけどさ。

閑話 私の好きな人。

突然だけど、私は今好きな人がいるの。

その人はやさしくてカッコ良くて……ちよっぴりえっち。

顔はかわいくて、髪の毛を伸ばしたら女の子に見えるそうなの。

その人の周りの空気もやわっこくて、えっと……にゅ、にゅーわ？
日向ぼっこしてる時みたいにはかぽかしてるよ！

その人の事を思い出すだけで、ちよっと幸せな気分になっちゃう。

……あ、いけないいけない。

ぼーっとして部屋を通り過ぎるところだった。

そっと扉を開けて、中をのぞき込む。

うん、まだ寝てるみたい。

最近の私の楽しみは、毎朝その人を起こす事。

「ユーリい、朝だよ」

体をゆすってみるけど、すやすやとかわいい寝息を立てたままのユーリ。

パツと起きるのは苦手みたい。

だから私は毎朝、ユーリにちよっぴりいたずらするの

「ていっ」

いきおいを付けて指をユーリのほっぺに伸ばす。
むにっちやわっこい感触。

もちもちのほっぺを触つてると何だか癒される。

そのまま指を下にずらすと、ユーリのくちびるに当たる。

朝だからかな？ちよっと乾燥しててカサカサ気味。

私は振り返って部屋の入り口を見る。

……うん、お姉ちゃんに見られてない。

最初にユーリを起こした時はお姉ちゃんに見付かって、後で怒られちゃったからね。

同じ失敗はしないのっ！

私はドキドキする胸を押さえながら、ユーリのくちびるに顔をよせた。

舌を伸ばして、よだれをくちびるに薄くぬるように舐める。

チロチロ、ペロペロ、時々ちゅっちゅっ。

そんな音を立てて、ユーリのくちびるを味わう。

「はふう……」

今日はこれくらいかな。

最後にくちびるを舌でなぞって、ユーリから離れた。

「にへへ、ちゅうしちゅったあ」

うれしさや恥ずかしさでほっぺが熱い。

ユーリにちゅってすると、ぼわぼわした気分になって、心が気持ちよくなっちゃう。

ちよっと癖になりそうなくらい。

やんやん、ってくねくねしてたらユーリがもぞもぞ動き始めた。

体をやさしくゆすつたら、閉じてた目がゆっくり開く。

「おはよう、ユーリ。朝だよ？」

「……………んう……………」

「起きないといたずらしちゃうよ？」

もうしちゃったけど。にへへ

ユーリはまだ寝ぼけてるみたいで、すぐに目を閉じようとする。

だから私は布団をひっぺがした。

でもあんまりやったらかわいそうだから、はがすのはお腹の上くらいまで。

「うう……………寒いよミナ……………」

「ほら、起きたらあったかいよ」

寒そうに体をよじってるユーリ。

そしたら、急に腕が伸びてきて捕まった。

「わわっ、ユーリ!？」

「んう……………ミナは暖かいなあ。……………よし、今日からミナは僕の抱き枕に決定」

そのまま布団の中に引きずり込まれて、ユーリに抱きしめられる。

あ、ユーリのおいだ……………。

ちよっぴりほっぺが熱いけど、なんだか幸せな気持ちになっちゃっ。

「……にへへ、ユーリの抱き枕になっちゃったあ」

胸板に顔をこすりつけて深呼吸。

鼻の中いっぱいユーリのおいが広がる。

前にユーリが私にしたのと同じ事をしてみたけど、これはなかなかすげえ。

全身にユーリのおいがついちゃう気がして、すごくえっちな。

「わあ……私、ユーリのせいでえっちなになっちゃったかも……」

って、ユーリ起こさないとお姉ちゃんに怒られちゃうよ！

このまま一日中くっついてたいけど、お姉ちゃんのげんこつは怖いもんね、うん。

ゆるわくを振り払って、私は体を離そうとする。

「わひゃうっ!?!」

逃げようともぞもぞ動いたら、がしつと強く抱きしめられる。

そして、ユーリの右手は私のお尻をつかんだ。

そのままむにむにと揉まれる。

「やつ、ユーリっ、んっ、んあっ」

変な声が出る。

なんだか恥ずかしくなって、ユーリに文句を言おうとして顔を上げたら、目を閉じてくーすか寝てた。ほっぺを叩いて起こそうと思っただけど、両腕はガツチリ押さえ込まれてる。抜け出そうと動いたら、

「きゃふっ、んあっ、あっ、やあん」

お尻をむにむにと揉まれる。

う、動けないよお……。

鼻からはユーリのおいが入ってくるし、動いたらお尻を揉まれるしで、だんだん頭がぼわぼわしてきた。

結局、様子を見に来たお姉ちゃんに助け出されるまで私は捕まっていた。

私はげんこつ、ユーリはお説教をお姉ちゃんからもらったけど、私にげんこつするのはなんだか納得いかないよお！

それとユーリは私に何をしたのか全然覚えてなかった。

寝ぼけてるユーリにあんまり近付いたらダメ、っってお姉ちゃんにもこっそり教えておいた。

……べ、べつに、ユーリの抱き枕は私だけでいいの、とか思っ
てないよ？

朝ご飯を食べて洗濯物を干し終わって。
お昼までやる事のない私はふらふらと歩いてた。

「……はふう」

今日の私はちよっぴりごきげん。

朝に抱きしめられたせいで、服からユーリのおいがいっぱい。

うれしいような恥ずかしいような、不思議な気分。

なんだかユーリに抱っこされてみたい。

そんな幸せ気分でてくてく廊下を歩いてたら、外から声が聞こえてきた。

窓をのぞくと、ユーリが庭を走り抜けてた。

そういえば、ご飯の後でとれーにんぐをやる、って言ってたっけ。
よく解らなかつたけど、あれがきつととれーにんぐなんだよね。

私は庭の入り口の木に隠れて、邪魔しないように観察をする事にした。

「49つ、50つ、51つ」

ユーリは地面に寝転んで、上半身だけを起こしてた。

なんだっけ、ふ、ふ………腹筋？

そうそう、腹筋。

ユーリすごいなあ、腹筋50回も出来るんだあ。

しばらく見てたら、ユーリは庭で一番大きい木の下に座り込んだ。

休憩かな？

朝の仕返しに驚かしちゃおう、って思って、私は足音を立てないよ

うにっっそりっっそり近付く。
後ろまでやってきて、いきおいよく抱きつく。

「ユーリっ」

「わひゃあっ!?!」

むぎゅっと腕を回したら、ユーリのおいがいっぱいいっぱい。

ほわぁ……汗くちやいよぉ……

ユーリのおいにキュンキュンしてたら、ぐいって体を持ち上げられた。

そのまま膝の上に乗せられて、後ろから抱きしめられる。

頭にぽふり、って温かさが広がる。

くしくしとやさしく撫でられて、思わず顔がとろけそうになっちゃう。

その後2人でユーリの持ってた袋の中身を点検する事にしたの。

最初に袋から出てきたのは、青くて短いぼっこみたいなの。

「これは……折り畳み傘？」

他にも果物の絵が描かれた缶とか、キラキラした首飾りとかいっぱい出てきたの。

もしかしてユーリって商人さん？

……でも、普通はこの袋に入りきらないよね、この量。

実はユーリって整理整頓の達人さん？

次から次へと出てくる中身に、私はぼかーんってしちゃった。

それから出てきた荷物を2人で倉庫に運んだの。

ユーリは私に軽い物しか持たせてくれなくて、自分は物がこぼれそうなくらい抱えてた。

時々ふらふらしながら歩いてく姿がちょっとかわいかった。

倉庫の2階で荷物をどさどさーって広げる。

首飾りや指輪だけでもちよっとした山になってるよ。

圧倒されてたら、ユーリに声をかけられた。

「ねえミナ、ちよっとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

なんだろ？ちよっとドキドキしちゃうなあ。

言われた通り目を閉じたら、左手をやさしくきゅってされた。くすぐったくてぴくん、ってしてたら何かが中指に当たる。

ユーリがもういいよって言ったから、ゆっくり目を開けてみた。

「わぁ……………！」

私の中指に、キレイな指輪がはめられていた。

小さい私の指にすっかりぴったりな大きさの、銀の指輪。

何よりびっくりなのは、

ユーリが、私の中指に……………！

私たちのいる西の大陸では、男の人が女の人に指輪をはめる事には特別な意味がある。

左手の中指はさらに特別。

それは『あなたは私のもの』って意味。

つまり、私はユーリに『結婚してください』って言われたようなものの。

思わず顔が熱くなっちゃうけど、ここで慌てちゃダメ。

多分ユーリは、そうだった事……この大陸の文化を知らない。

王国の事も魔法の事も知らなかったみたいだから、きっと別の大陸から来たんだと思う。

だから、これは逆に良い事かも。

今ならキセイジジツを作って、ユーリのお嫁さんになれる。

私はまだまだ子供だし、周りにはお姉ちゃんやエアリイさんもいるから、ユーリはいっぱいゆるわくされちゃう。

でも、私だってユーリが好きだもん！他のみんなには負けないからねっ。

心の中で手をぐって握って、私はユーリに笑顔を向けた。

「ありがとう、ユーリでも、こんなに立派なの私がもらっていいのっ。」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

やっぱり解ってないみたい。

それなら、って私はずい笑いを浮かべて言った。

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないね」

その後の事は……にへへ、ナイショ

だって思い出しただけで、体が熱くなってびくんびくんしちゃうもん。

そうそう、指輪を贈られたら、返事はちゅうでするんだよ！

ちゅうして、私の全てをあなたに捧げます、って示すの。

つまりこれで、私はユーリ専用っ

だから今度ユーリが、その……さっきみたく、私のおっぱいさわりたくなったら……いい、いいよ？

恥ずかしいから誰もいないところで、ね

そんな気持ちも込めて、私はユーリに言った。

「……また、しようね」

閑話 私の好きな人。(後書き)

今回は視点を変えてミナから見た世界を。

子供っぽく見せる為に漢字を平仮名に代えたり、言い回しを素直な表現にしたり……いやぁ、難産でした。

そして今回はいつもより短い(もじかい)です。

それでも拙文に付き合っ頂いた皆様に感謝を。

お茶会にお呼ばれます。

昼ご飯を食べて、ちょっとした雑用をこなして。

そんなこんなで時刻は午後2時。

何で正確な時間が解るかと言うと、袋から腕時計が出て来たから。

耐水耐圧耐衝撃が売りのゴツイやつだ。

取り敢えずアレは『四次元麻袋』ってあだ名を付けよう。

話を戻して、今僕は部屋の中にいる。

これまた四次元麻袋から出て来た、多分この世界風の衣服を着込んでいるからだ。

黒を基調として、肩から袖口まで蔦柄の刺繍が施されたシャツと、同じく黒の下地と側面に金の蔦柄が走るズボン。更にはこの編み上げ靴まで黒だ。刺繍はないけど、代わりに靴紐が金色。

いやいや、派手っていうか趣味悪くない？

コスプレとかなら格好いい服装かも解らないけど、一市民が着る服装としてはかなり異彩を放ってる。

確かに、僕が最初に着た学生服は背中がバツクリ裂けてるし、亡くなった神父さんの服を借りっぱなしって訳にもいかない。

でも、だからってコレが代案ってのはどうだろう。

そんな事を考えてると、ドアをノックする音が聞こえてくる。

「ユーリさん、準備出来ましたか？」

「一応出来たけど……笑わないでね」

僕の声に、頭に？を浮かべながらシーナがドアを開けた。
シーナは僕の姿を見て、部屋の入り口で息を呑み固まってしまった。

そりゃそつだよなあ。幾らファンタジーな世界でもコレは無いよなあ。

気恥ずかしさで頬に血が集まるのを自覚しながら、どうしたもんかと頬をぽりぽりと搔く。
と、固まっていたシーナがぼつりと眩く。

「……………素敵です……………」

「へっ？」

「あ、いえっ！何でもありませんっ」

何だろう？つい「キモッ」とか「ダサッ」とか口に出ちゃったのかな。

……………考えてると悲しくなるから止めよう、うん。

それにシーナは良い子だからそんな事言わないもんね！

や、まだ年聞いてないけど多分僕とそつ変わらないと思う。

同世代の娘さん捕まえて良い子も無いか。

取り敢えず現実逃避を止めて真実へ一歩踏み出してみる。

「えっと……………ど、どうかな？」

意を決して聞いてみる。

願わくばポジティブに受け取れる罵倒でありますように！

「服の落ち着いた気品がユーリさんの魅力を引き立てていてすごく格好いいですよ。おとぎ話に出て来る勇者様みたいです」

「イイイヤツホオオオイ！」

まさかの全肯定きたあああ！

お世辞でも何でもいい、罵倒じゃなかったから何でもいい！
嬉しさの余りシーナの手を握りぶんぶん振りたくる。

「ありがとうシーナ！」

「きゃ！？えっと、あの……どういたしまして？」

シーナは戸惑ってるみたいだけど、今は僕の感謝を受け取って欲しい。

小さい頃から妹の着せ替え人形役をやっていた成果がここで出たのかな。

妹よ、天国から見てるかい？お兄ちゃんは妹のおかげで格好良くなれたよ。

あ、いけない。妹の事思い出したら涙がちよきれそつだ。

今度は突然しんみりしだした僕に、シーナは更に戸惑いを深くした。

「あ、あの、ユーリさん？」

「ん、ああ、大丈夫。ちょっと色々思い出しちゃったただけだから」「そう、ですか？」

握ったままだったシーナの手を離す。

細くて白くて小さな手。

細工品のような、って言葉はシーナの為にあるんだなあ。

そんな風に思いながら、僕はシーナに思い付いた事を言う。

「先にミナと外で待っててもらえる？」

「どうかしたんですか？」

「せっかくだから、お土産持って行こうと思って。勿論2人の分もあるよ」

「私達にはそんな気を使つて頂かなくても……」

「いいからいいから。じゃ、ちょっと行つてくるね」

何か言いたげなシーナを残して、僕は倉庫へ向かう。

ふっふっふ、3人共喜んでくれるかな？

ニヤニヤしながら階段を駆け下り、教会の玄関を抜ける。

朝より数段傾いた太陽に出迎えられ、一瞬だけ目が眩んだ。

すぐに目は慣れ、倉庫の古びた扉を開けて、階段を上へ。

とんとんとん、とリズムを刻みながら2階に到着。

あつたあつた、みかんに桃……ついでにパインもあつた方がいいかな？

僕は倉庫の隅に置いておいた麻袋に手を突っ込み、無造作に中の物を掴み取る。

うん、あつたあつた。

目的の物を腕に抱えて、僕のニヤニヤは更に濃くなった。

3人の 特にエアリーさんのびっくりする顔を早く見てみたいなあ！

「3人共、いらっしやい。今か今かと待ちわびたよ」

「エアリーさん、今日はお茶会に呼んで頂きありがとうございます」「はっはっは、相変わらずだなシーナ君は。もっと気さくに話してくれても構わないよ？」

「エアリーさん、こんにちは！」

「こんにちは、ミナ君。今日も元気いっぱいだね」

「さつき振りです。あ、これお土産です。みんなで食べましょう」

「ああ、わざわざ済まないね。ありがたく頂くとしよう。……それはそうとユーリ君、すごい格好だね。王国の舞踏会にでも出るのかい？」

「うぐっ。に、似合ってますか、やっぱり」

「いやいや、余りに素敵なのでね。貴族様よりも格好いいよ」

そんな会話を交わしながらエアリーさんの家にお邪魔する。

出迎えてくれたエアリーさんは朝の時とは違って、薄い水色のワンピースを着てた。

清楚な雰囲気と柔らかい微笑みが合わさって、どこかのお姫様みたいだ。

家も4LDKくらいありそうなログハウスで、小綺麗な内装が落ちて着いた雰囲気醸し出してる。

もうお茶の用意はしてあったようで、いい匂いが漂ってくる。

「まあ、掛けて待つていてくれ。すぐにお茶を持ってくる」

「あ、僕もお手伝いしますよ。お土産も広げようと思いますし」

「そうかい？じゃあミノ君とシーナ君はそのまま座つていてくれ」

足取りも軽やかなエアリースさんに続いて台所へ。

お茶会が余程楽しみだったのかひどくご機嫌な様子。長い耳もピクピク動いてるし。

触りたいなあ。ハムハムしたいなあ。

と、僕の邪な視線に気付いたのがエアリースさんが振り返る。

どうしたんだい？と微笑みを浮かべて僕を見る姿が、もうたまらんですたい。

「ちょっと大きめの器を3つと、フォークを人数分お願いします」

「ああ、解った」

僕はみかんの缶詰めを手に取ると、缶切り片手に開け始めた。

きこきこきこ、と軽快なリズムに乗せて鼻歌なんかも歌っちゃってみたり。

「集え、銀河の守護神、砕け、悪の野望を」

「なかなか勇ましい歌だね、ユーリ君。何を謳い上げた曲なんだい？」

「全てを手に入れるんだ…… あ、これですか？この曲は昔妹が

僕のテーマソングとして作ってくれたんですよ」

「そうだったのかい？いやはや、才能に溢れた妹君だね」

ちよつと自慢げになる。

妹はかわいくて賢くて優しく、まるで天使みたいな子だった。絵も上手だし声も綺麗だし作詞作曲も出来て運動も得意。

その上僕を「おにいちゃん」って慕ってくれたし。

え、シスコン？ハハハ、何をおっしゃる。

つと、もう一周してみたいで缶の蓋が上がっていた。

手を切らないように注意しつつ、蓋を開けて木のボウルに中身を移す。

うん、まずみかんは出来上がり。

エアリーさんを見ると、目をキラキラさせてみかんを見ていた。

「ゆ、ユーリ君っ。この美味しそうなのは一体何だいっ？」

テンションが振り切っているのか、少し語尾に力が入ってる。

なんて言うか、初めて見るご馳走を前にした子供みたいですがごくかわいい。

「これはみかんっていう、僕の国で一般的に食べられていた果物をシロップ漬けにしたものですよ。他にも桃とパイナップルって果物も持つてきました」

「なるほど、これは、その、ううむ。いや、はっきり言おう、早く食べたい！」

言いながらも目はみかんに釘付けなエアリーさん。

実はちよつぱり食いしん坊さんなのかな？

なんて事を考えながら、僕は桃の缶詰めに手を伸ばした。開けて中身を移す度に、エアリーさんは黄色い悲鳴というか、感嘆の声を上げる。

どの世界の女の子も、果物には弱いんだなあ。

予想以上にかわいい反応を見せるエアリーさんを微笑ましく思いながら、僕は缶詰めの空を片付け始めた。

「ずいぶんと盛り上がりすぎていたみたいですね……え、何ですかこれ？」

「ん、なんだか甘い匂い……ほわぁっ、ナニコレ!？」

器を持ってリビングに戻ると、2人共目を丸くしてた。

やっぱりこの世界の食べ物と地球の食べ物は少し違うみたいだ。

シーナはフォークで桃をつんつんして、ミナはパイんに鼻を近づけて匂いを嗅いでる。

エアリーさんは待ちきれない様子で視線をみかんに向けながら、香草茶 多分ハーブティー的なものを注いでいる。

やばい、みんなかわいすぎて鼻血出そうだ。

取り敢えずみんなにお茶が行き渡ったのを確認して、フォークを握らせる。

「今日集まってくれた皆に精霊の祝福があらん事を……。待ちきれん、突撃だ!」

「おー!」

ファンタジー特有の、食べる前に捧げるお祈りが見れるかと思っただけならそんな事はなかった。

勇ましくフォークを握り締めるエアリイさんと、腕を振り上げてノリノリなミナ。

シーナなら修道女だし真面目にお祈りしてるはずっ、と目を向けたら既にお祈りを終えて臨戦態勢だった。

いやいや、何倍速でお祈り終わらせたのん？

女の子パワーに圧倒されて若干言葉が怪しくなる僕。

シーナは桃を小さく切り分け、とても上品に食べている。

うん、お嬢様っぽくてかわいい。

ミナは口いっぱいパインを頬張ってる。

なんだかりすみたいてかわいい。

エアリイさんは、みかんをいっぺんに5個くらいフォークに刺して口に放り込んで、幸せいっばいな顔でもぐもぐしてた。

やだ、なにこのかわいいイキモノ。

今日はエアリイさんの破壊力が半端じゃないなあ、とみんなを見てへらへら笑いながら、僕は温くなった香草茶をすすった。

「で、取り敢えず今日はみんなに僕の事を知ってもらおうかと思うんだ」

果物との死闘も終わってまったりとした空気が流れ始めた頃、僕はそう切り出した。

その言葉にエアリイさんとシーナは姿勢を正すけど、ミナはへにやつと首を傾げる。

「ユーリの事？」

「そうそう、僕の事。例えば……ミナは僕が、別の国から来たって言ったら信じる？」

「うん、ユーリの事ならなんでも信じるよ！」

いや、嬉しいけどね、そうじゃないんだよ。

聞き方を間違えたかなあ、と頬をぽりぽり搔いているとシーナが助け船を出してくれた。

「確かに、この国に住む方なら知っている事を、ユーリさんはご存知無かったですからね。異国の方と考えるのが自然ですね」

「ありがとうシーナ、まあ、言いたいのはそのう事。で、こんな事言ったら冗談だと思われるかもしれないんだけどさ」

僕はみんなの顔を見渡して、爆弾を投下してみた。

「もし、僕が『別の世界』から来たって言ったら、信じる？」

うわ、みんなぼかーんってしてる！

そりゃそうだよなあ、いきなり異世界人です、なんて言われてもなあ。

何言ってるんだコイツ的な視線を向けられて、最悪脳に蛆が湧いたって思われるのがオチ……いやいや、みんなを信じるんだ。

果物であんな幸せそうに笑う女の子達ならそんな酷い事は言わない
ハズ！

戦々恐々としながらみんなの様子を窺ってみる。

ミナは、僕が何を言っているのか解っていないみたい。

そもそも別の世界って何？って顔をしてる。

シーナは軽くパニックになってるみたい。

うん、その気持ちはよく解るよ。最初僕もパニックだったからね。

エアリイさんかというと、何やら考え込むように僕をじっと見てた。

あ、その目で僕を見ちゃダメ、なんかゾクゾクきちゃう。

「そう言ったって事は、ユーリ君自身そう思える理由を見つけたの
かい？」

おおっ、エアリイさんひょっとして信じてくれた！？

ちよっと感激しながら、僕は口を開いた。

「僕の世界と違う所を見つけて、そう考えたんです」

「違う所、とはなかなか抽象的だね。例えば何が違ったのかな？」

「そうですね、一番の違いは……この世界に魔法がある事、ですか
ね」

僕の言葉に耳をピク、と動かす。

反応が解りやすくていいな。

「僕のいた世界では魔法は空想の産物でしかありませんでした」

「それは大きな違いだね。少なくとも、私からしてみれば魔法が存在しないなんて信じられないよ。空気と同じ、在って当たり前のものである」

「それから、エアリイさんみたいなエルフもいません。会話が出る程の知性を持った生物は人間しかいません」

「それは……絶滅した、という訳ではなく？」

「ええ、最初から人間しか種族として存在していません」

ううむ、と考え込むエアリイさん。

別の大陸にもエルフや獣人なんかが大勢いるって話だし、全体から見ると少数民族な人間しか存在しない世界ってものが想像付かないんだろう。

「ただ、幾ら僕が自分の世界と違う所を並べても、僕が異世界人だと証明するのは難しいですけど」

「え、何ですか？」

それまで聞き役に徹していたシーナから疑問の声が上がる。

答えようとした僕より早く、エアリイさんが綺麗な声を響かせた。

「簡単な事だよ、シーナ君。彼は自分の世界と私達の世界、両方を知っているから2つの世界が違うものだと判断出来る。しかし私達は彼の世界を知らないから、私達の世界を基準にする事でしか思考出来ない。つまり、彼がどんなに説明しても、私達からしてみれば証拠の無い作り話にしか聞こえない、という事だよ」

僕が言いたかった事を完璧に全部言われちゃった。

流石エアリイさん、知的な所も素敵です。

ただ、ミナが睨むような視線を向けているのが心苦しい。

最初から僕を全肯定してくれるミナにしてみたら、今のエアリイさんの話は僕の言葉を信用してないって取れるからなあ。

……いや、僕もエアリイさんがどう思ってるのか解らないからドキドキだけだね。

「エアリイさんの言う通り、僕が異世界人だって証拠が無いんだ。異世界が在るって証明する方法も解らないし」

「おや、証拠ならここに在る……在ったじゃないか」

「へ？」

微妙に言い直して、エアリイさんは空になったポウルを指差す。

そこに在ったもの……みかん？

「私の知る限り、どの大陸にもこんなに美味しい果物は無いよ。それにこれが入っていたあの缶。あれを作る技術も、この世界には無いものだ」

ああっ、言われてみれば！

さっきまで散々その事でニヤニヤしてたのに、すっかり忘れてた。みんなの笑顔がかわいかったせいにしておこう。

ん？という事は……、

僕の視線をいたずらっ子のような笑みで受け止めるエアリイさん。

「ふふ、意地悪な言い方をしてすまなかったね。いやなに、存外君が困ってる姿がかわいかったのね」

「ああつ、エアリースン僕をからかっただんですね!？」

「ははは、許してくれないか。ただ、私は最初から君の言う事を信じていたよ?」

そう言つて手を合わせ上目遣いに僕を見るエアリースン。

そんな事で騙されな……騙されました。

だつて反則級にかわいいんだもん!ああ、こつやつて男は女の子に騙されていくんだなあ。

そんな事を考えていると、ミナが僕の膝に座り抱き付いてきた。

そのまま首だけエアリースンに向けて、威嚇するように睨んでいる。

「ユーリをいじめたらダメなの!」

ミナの健気な言葉に僕のハートは撃ち抜かれた。

もう、ズギューンつて。

頭を優しく撫でると、くすぐったそうにすり寄ってくる。

慌てたのはエアリースンだ。

「い、いや、いじめた訳ではないよ?」

「でもユーリを困らせて笑つてたもん!」

「そ、それはなんと云うか、ミナ君もかわいいと思わなかったかい?」

「それとこれは別なのー！」

あ、ミナも思っただ。

言っとくけど、男にかわいいは褒め言葉じゃないんだからね？

やいのやいのと賑やかになる2人とは対照的に、シーナは黙ったままだ。

どうしたんだろ？と首を向けてみると、丁度顔を上げたシーナと目が合った。

「なるほど……ユーリさんは異世界人だったんですね」

「え、いまさらー!？」

マイペースさんめ。

意外とシーナって天然さん？

普段しつかりしてるから、こういうシーナはなんか新鮮な気がする。取り敢えず収集が付かなくなったから、僕は香草茶をすすってまったり流れに身を任せる事にした。

投げっぱなし？勿論。

ハハハ、流されるのは得意なんですよ。

場所を移して教会の裏庭。

あの後僕に魔法が使えるのか気になって、エアリィさんに教えてもらう事になった。

すぐに仲直りしたみたいで、ミナはエアリィさんと一緒に的を準備

してる。

仲睦まじい2人を見てると和み度数が半端じゃない。

シーナはと言うと、万が一の時の為にライブの杖と傷薬、それに包帯なんかも用意しておくって教会の中へ引っ込んでいった。

大げさに思えるけど、失敗したらそれだけ危険って事だよね。

よしつと気合いを入れて、僕は気持ちを新たにした。

丁度準備も終わったみたいでやり遂げた感を滲ませながらミナが駆け寄ってくる。

そのままぼふって抱き付かれ、ミナは褒めて褒めて、としつぽを振る子犬みたいにじゃれついてきた。

頭をくしくし撫でると気持ち良さそうに目を細める。

「はぁ……癒されるわぁ」

「にへへ、ユーリの手やさしいから好き」

ミナを撫でてしているとエアリイさんも僕の元へやってきた。

ほぼ無意識に手が伸びて、

「うなっ!?!」

気付くと僕の右手はエアリイさんの頭に。

ナデナデナデナデ。

さらさらの髪の毛は手触りが良くて、いつまでも触っていたくなる。つていうか「うなっ」って。

エアリイさん猫みたいな声上げたね。かわいいからいいけど。

って、僕は何をやってるんだ!?

つい勢いのままぬエアリイさんの頭撫でてたけど、ひょっとして怒ってるかな?

うわぁ、エアリイさん俯いて肩ぶるぶるさせてるし。

ていうか、大人の女性を子供扱いしちゃ怒るよね、普通。あ、でも撫でると気持ち良いや。

なでなでなでなで。

勿論左手でミナを撫でるのも忘れない。

おおっ、両手が幸せいっぱいだ。

「何してるんですか、ユーリさん」

突然背後から聞こえてきた声にびくうっとする。振り向いたら半目で僕を見るシーナの姿が。

「いや、えっと、なんていうか」

からからから。

いい感じに僕の頭は空回りを披露した。

別にやましい事をしてた訳じゃないから慌てなくてもいいけど、小心者でチキンな僕はこういう時に思いつ切り慌てる。

シーナは溜め息を吐いて、腰に手を当てるとお説教を始めた。

「いいですかユーリさん、年上の方を子供扱いしてはいけません。ミナのように小さい子ならまだしも、エアリイさんのように大人の方の頭を撫でるなんて失礼ですよ。まだエアリイさんだったから良かったですけど、貴族様相手にやってしまったら不敬罪で投獄される事もあるんですから。だいたいユーリさんは礼儀を知らなすぎます。異世界人だからといって、全てが許される訳ではありませんからね。丁度いい機会です、この際礼儀作法をみっちり教えてあげます」

うわあ、シーナのマシンガンお説教タイム始まったよ。
スイッチ入ると途端に喋り出すんだよねえ。

「い、いや、シーナ君。せっかくだけど、今は魔法の練習だから、その話は夕食後にでもじっくりやってくれないか？」
「む、そうでしたね。仕方ありません、お説教はまた後でやりましょう」

ナイス、エアリイさん！

お礼に後でみかんの缶詰めと缶切りをあげちゃう。

ミナは僕の陰に隠れて様子を窺ってた。シーナのげんこつ痛そうだったもんね。

取り敢えずシーナも引き下がったくれたし、心置きなく魔法の練習が出来る。

ミナも僕から離れて、後ろの長椅子に座って足をぶらぶらさせてる。

「それじゃあ、やり方を教えるよ。まずは体を楽にしてみてください」
言われた通り全身から無駄な力を抜く。魔法の練習、って聞いて思わず体が緊張してみたい。

「次に意識を体の内側に向けるんだ。目を閉じると集中しやすいかもしれないな。全身の血流を感じるように、指先、腕、足先、太腿、背中、首、心臓なんかを意識してみるといい」

目を閉じて意識を巡らせてみる。

血流を感じる、ってどんな感覚なのかな？

運動した後に耳の血管がドクンドクン煩く鳴るような感覚かな。

あれだったらイメージしやすいんだけど。

まあ、試しにやってみよう。合ったらエアリースさんがなんか言ってくれるはずだし。

最初は心臓から。首、左腕、両足、右腕って順番に意識を広げていく。

「すごいな、ユーリ君は。もうコツを掴んだようだね、今度はその感覚を指先に集めるように意識してごらん」

やっぱりあの感覚で合ってたみたいだ。

今度はそれを指先に集める……何かイメージが有った方がやりやすいよね。

なんかそれっぽいイメージ……あ、魔 光殺砲でいいか。

指先に意識を集めて、と。
なんだか指先が熱を持ってきた気がする。

「充分出来たと思ったたら、指先を対象　あの的に向けて、使いた
い魔法を唱えるんだ。ファイアーの魔導書があるから、これを使っ
てみると」

「ファイアー！」

あ、なんか先走って呪文唱えちゃった。

さっきミナとエアリイさんが木の枝を組み合わせで作った人形の
の足元から、高さ2mくらいの火柱が上がる。

でもすぐに炎は消えちゃって、失敗したかな？って思ったんだけど、
よく見たら的が燃え尽きてて灰一つ残って無かった。

うわぁ……ファイアーって名前でしょぼいの想像してたけど、
威力凄まじいなあ。丸く地面禿げてるし。

なんとも言えない表情でエアリイさんを見ると、真っ青な顔をして
いた。

え、もしかしてなんかマズかった？

「……ユーリ君、正直に答えてくれ。今、君は、何をした？」

「え、えっと、言われた通りのを狙って呪文唱えただけなんです
が」
「質問を変えよう。君は今、魔導書を持っていたりしないかい？」

「持って無いです……っていうか、魔導書無いまま魔法使えちゃい

ました」

「……そう、か。いやはや、つくづく君は私を驚かせてくれるね」

感心半分呆れ半分、といった感じでエアリィさんは苦笑を浮かべた。僕も自分にちよつと呆れてるけどさ。

この世界の理を無視して、理魔法を放つてのもどうなんだろう。理魔法といえば、この世界の魔法ってファイーエ プレムっぽいよね。

でもエルフや獣人もいるし、まるつきり同じじゃないよねえ。

その内マムクートとか出るのかな？

竜族の女の子とかかわいいんだらうなあ。

しかも合法ロリかぁ……ごくつ。

「……いや、信じられない気持ちは解るがそろそろ帰ってきたまえ
ユーリ君」

おっと、現実逃避してたらエアリィさんに怒られちゃった。

失敗失敗。

「取り敢えず、この魔導書を渡しておくよ。誰かに見られてもこれで言い訳出来るだらうからね」

「ありがとうございます。まあ、極力誤魔化すか使わない方がいいですよね」

「加えて異世界人だというのも黙っていた方がいいだろうね。心無い人が聞けば研究の為に飼いや殺しにされるか、危険だと思われて命を狙われるか」

「うへえ……おっかないですね」

一気に話が血腥くなってきた。

ゲームなら幾らでも返り討ちにしてきたけど、現実として降りかかると考えたくも無い話題だよな。

それにしても、つくづくテンプレだなあ。

異世界に飛んだらチート級の魔法が使えるとか、周りは美少女ばかりだとか。

まあ、今日の所は平和に終わりそうだし、特に心配は無いかな。

「山賊だ！山賊が出たぞお！」

ああ、もう！

どこまでテンプレな展開が続くんだよお！

したくなかった初体験です。

山賊が現れたって聞いて、村は大騒ぎだった。

村の自警団が防衛と迎撃に出るようで、エアリイさんもそっちへ向かった。

僕はと言うと、村人の避難誘導と教会の警戒に当たっていた。いやいや、怖くて戦場なんか行けないって。

足腰の弱いお婆さんを背負って教会へ運んだり、鳴子を設置したり。僕に出来る精一杯の事をやる。

本当にいざとなったら……魔法で、山賊をやっつける。

出来れば戦いたくもないし、その辺の事は考えたくもない。

シーナとミナは教会の中に避難させて、村のみんなと待機させてる。今は村の東側から山賊が攻めて来ているみたいだけど、こういうパターンの戦いだと北の森を抜けてくるはみ出し者が1人くらいいるんだよなあ。

って、落ち着け僕。思考が分裂し始めてるじゃないか。

色んな事を思い浮かべては考える前に別の事を思い浮かべて気を逸らす、僕特有のパニックだ。

普段ならいいけど、今はそれが命に関わってくる。

だから僕は深呼吸をして無理矢理にでも落ち着く事にした。新鮮な空気が肺を満たして、少し頭が冷える。

よしっ、ちょっと落ち着いた。

妙な緊張で強張っていた右手の握り拳をほどく。

大丈夫、いざとなったらファイアーで脅かしてやればいいんだ。

流石に持っている武器が手元だけ残して燃え尽きたらびっくりするだろうし。

それに上手く撃退出来たら、ミナがキスしてくれたりして……？

でへへ、と妄想に頬を緩ませる。

おっといけないいけない、ちゃんと警戒しないと。

敵なんか来る訳無いって決めつけてる歩哨は間違い無くスナイポされてお陀仏だし。

でもエアリーさんは大丈夫かなあ？

心配はいらないよ、って僕に微笑みながら弓と矢束を背負って家の外へ。

その姿が格好良くてちよつと憧れた。

凜々しいエアリーさんもいいなあ。

僕がまだ避難してない村人を探しに出た所で、村の入り口で弓を使える数人と合流して引き連れて森の中へ向かうエアリーさんを見掛けた。

なるほど、森の中から弓を射掛ければ、すぐには見付からないだろう。

自警団の人達は鉄板をくつつけまくった、ガチムチアーマーみたいな鎧を着て行った。

あれならレイピアでも使われない限り致命傷は負わないだろう。

まあ山賊がレイピアなんて持ってないよなあ。手斧を振り回してそのうなイメージがある。

つと、また思考が走ってるよ。落ち着けて僕。

妙な高揚と緊張が混ざって、自分じゃどうしようも無いくらい浮き足立ってる。

やっぱり僕ってチキンだなあ……って、ちょっと自嘲してみる。シーナや、ミナだって取り乱さずに他の人達を気に掛けていたっていうのに、僕は見えない何か相手に独り相撲状態だ。そんな落ち着かない時間が、5分、10分と過ぎた頃。

『カランカラン！』

一瞬息が、心臓が止まる。来た。

鳴子が響いたのは教会の裏手に広がる、ちょっとした藪の中。震える足を叱咤して教会の裏庭へ急ぐ。教会をぐるっと囲む2mくらいの塀を、勢いを付けてよじ登る。

『ヒュン！』

「うわぁっ!?!」

目の前を何かが通り過ぎる。それに驚いてバランスを崩し、地面にべちゃっと落ちた。

この地面に這いつくばる感じ、久し振りだなあ。つと、ふざけてる場合じゃない。

一歩間違ってたら死んでたね、アレ。立ち上がって前を見ると、筋肉ムキムキでスキンヘッドで煤けたタンクトップとズボン姿の男性が1人。

「うわ、テンプレ通りの山賊だ」

「ああん!？」

「柄も悪いなあ、って山賊だから当たり前か」

ある種の感動を覚える。

山賊は右手に切れ味の悪そうな大きい手斧を提げて、僕を見てニヤニヤ笑い出した。

「辺境の村に貴族の坊ちゃんとはツイてるぜ。たんまり金が手に入りそうだ」

え、貴族?どこにそんな人が?

キョロキョロと辺りを見渡すけど、そんな人は見当たらない。

ああ、貴族って僕の事か。やっぱりこの服一般的な服装じゃないんだよ、きつと。

ちよつと天然だった僕の行動を、山賊は素敵に勘違いしていた。

「残念だったなあ、お前の味方は誰もいないぜ?逃げ道も無いようだしなあ」

下卑た笑い方をする山賊。

あれが俗に言う悪い笑みかあ、僕には真似出来そうにないなあ。ともあれ、油断している今がチャンスだ。

1回だけなら奇襲も出来るし、上手くいけば退かせる事も可能だ。

よし、落ち着け僕。絶対に成功させるぞ。

出来るだけ体を動かさないように意識しながら、少しずつ指先に感覚を集中させる。

さっきの練習の時よりも、強い熱と鼓動を感じる。狙いは右手に持つ手斧。

しっかりと見据えて言葉を放つ。

「ファイアー！」

僕の掛け声と同時に、山賊の右手に火柱が上がる。

でもそれは一瞬で掻き消える。

僕のように注視してなければ視界に赤いフラッシュが焚かれただけにしか見えないだろう。

そこから、更に動きが生まれる。

手首から先を失った腕が跳ね上がる。それまで支えていた重さが手首毎無くなつた反動だ。

「うおおっ!?! な、なんだこりゃあ!?!」

跳ね上がった自分の腕の動きに、次いで自分の手首から先が消失している事に顔を驚愕で歪める山賊。間髪入れず、僕は声を張り上げた。

「今のは脅しだ！大人しくしないと、次は命を失うぞ！」

声が震えなかった自分を褒めてやりたい。

だって、あんな、手首から先が無くなるか思ってたし！

やだよお、グロいよお、威力高過ぎだつてば。

断面は炭化したのか真っ黒だし。

出血は無いみたいだから、遠目から見たら特撮の特殊メイクに……

ごめんなさい、無理です。見えません。

胃から上がってくる酸っぱい液に辟易しながら、僕は山賊を睨み付けた。

勿論視線は山賊の眉間に集中させる。じゃないと吐きそう。

対する山賊はまだ何が起きたのか理解出来ていないみたいで、目を白黒させている。

けど、僕がファイアーの魔導書を構えているのを見て、何が起きたのか悟ったようだ。

忌々しげに僕を睨み返す山賊。

「てめえ、舐めた真似してくれるじゃねえか！」

「っ、動くなつて！」

わざと魔導書を前に突き出すように見せる。けど山賊はそんなのお構いなしに、僕へ突っ込んできた。

「っわぁっ！？」

「このガキ、ちょこまかと！」
「ちょ、ま、危ないって！」

僕の首くらいある太い腕を振り回す山賊。

それを不格好だけど何とか避けていく。

冗談じゃない、あんなの当たったら肋骨折れるって！

山賊は怒り狂って僕を殴り殺そうと腕を振り上げる。

顔や脇腹を拳が掠める度、新たな恐怖が湧き上がってくる。

初めの内はまだ機敏に反応出来たけど、怖くて体が言う事を聞かなくなってきた。

ぎりぎりの所で避け続けるけど、遂に壁際へ追い詰められた。

「手間掛けさせやがって。悪あがきもここまでだ！」

ヤバい、逃げたくても膝に力が入らない。

恐怖と疲労で地面に張り付いた両足が、がくがく震えだした。

いきなり濃厚に薫りだした死の臭いに僕の思考は恐怖一色に染まる。

左腕を振り上げる山賊。

眼前に迫り来るそれを、僕は混乱と恐怖に塗れた眼で見っていた。

『 ヒュン 』

突然生まれた音と共に、山賊の左腕が左に逸れる。

僕の顔を掠めて背後の壁に当たった衝撃が背中を伝う。多分扉にはヒビが入ったんじゃないだろうか。

目に飛び込んできたのは山賊の肘に刺さった一本の矢。

さっきの音は矢の風切り音だったみたい。
不意に山賊の体が揺れて、そのままぐらっと地面に倒れ込んだ。
その側頭にもう一本矢が刺さっていた。

「大丈夫か、ユーリ君っ!？」

聞こえた声に、僕はやっと状況を理解した。

右へ振り向くと弓を持ったまま駆け寄るエアリイさんの姿が。

ああ、エアリイさんが女神様に見える。

「怪我は無いかい？向こうは片付いたから様子を見に来たんだが、間に合って良かったよ」

ぺたぺたと僕の体を触って怪我が無いか確認する。

傷を負ってないのが解りほっとした笑みを浮かべるエアリイさんを見て、僕の緊張の糸が切れた。

思わず両手を広げてエアリイさんに抱き付いた。

「エアリイさあくん！」

「な、わ、ユーリ君っ!？」

「怖かったよあ。殺されるかと思ったあ」

「だ、大丈夫、ユーリ君をイジめる奴は私が成敗したから!だから、その、ユーリ君っ、落ち着いてくれ」

「大丈夫?怖いのではない？」

「あ、ああ、大丈夫だよ」

「えへへえ、エアリイさん強くて優しいから好き」

「うなっ!?! ちょ、待ってくれ、ユーリ君っ!?!」

「むぎゅっ」

「っ!?!」

……はい、落ち着きました。

さっきの僕は黒歴史なので忘れて下さい。忘れる、忘れるんだあ!

……まあアレだよ、恐怖の反動でちょっぴり幼児退行しただけさ。

今じゃすっかり落ち着いて普段通りの僕に戻ったさ!

って言いたいけど、僕は今エアリイさんに背負われてる。

情けない事に腰が抜けて立てないんだ。

色々恥ずかしい所も見せちゃったし、エアリイさん呆れてなかったらしいなあ。

「ユーリ君、もっとしっぴかり掴まってくれ。落ちてしまっよ?」

「ああすいません。重くないですか?」

「軽過ぎるくらいだよ。まるで女の子みたいだ」

女の子みたい、かあ。

ちょっぴりシヨックを受けつつ、僕は前に回した手をエアリイさんに巻き付けるように動かしてしがみついた。

「きゃん!」

かわいらしい悲鳴と左手の掌に広がる柔らかく幸せな感触。
擬音で表すなら、もにゅっ、と言った感じ。
ちよつと掌にびったりフィットする大きさで、沈み込んだ指を優しく包む弾力性。

これはまさしく、おっぱい！

つて、幸せに浸ってる場合じゃない。
ただでさえ格好悪い所を見せてるのに、この上エロ魔神だなんて思われたらエアリイさんに嫌われちゃうよ！
慌てて手を退けようとするより一瞬速く衝撃が左手首を襲った。

『バリーン！』

突然の衝撃に僕もエアリイさんも驚いて後ろに倒れ込む。
あ、エアリイさんの髪からいい香り。
思わずまったり仕掛けた僕の目に映ったのは、左手首の時計に突き刺さった鉄の矢。
液晶が割れ中部まで食い込んでいるけど、底部の板に遮られて僕の手首には傷一つ付いて無かった。
慌てて矢の飛んできた方を見ると、森の中で大柄な男が僕に弓を構えているのが見えた。
恐らく山賊の一味だろう。
僕達が無傷なのを見て次の矢をつがえ始めた。

今の矢、エアリイさんを狙ってた？

結果的に僕の時計に命中したとは言え、それはイレギュラー。最初に狙ってたのはその奥、エアリイさんの心臓付近だ。

アイツは、エアリイさんを殺そうとした？

僕の冷静な部分が早く逃げろ、って叫んでる。
エアリイさんを担いで物陰に走れと悲鳴を上げる。
でも、アイツが何をしようとしたのかを理解した時、僕はぶち切れた。

許さない。

上体を起こしてアイツを睨み付けた。

頭から熱が全身に回って、燃えているような感覚が広がる。

アイツから僕を庇おうと動くエアリイさんを優しく抱き締めてその動きを封じる。

今なら全身に流れる魔力を感じられる。

アイツがつかえた矢が空を疾りながら僕の頭部へ向かう。

「ユーリ君っ！」

叫ぶように僕の名前を呼ぶエアリイさん。
鍬が僕の額数cmまで迫って、そのまま消失した。
なんの事は無い、鍬から順に熱で蒸発させてやっただけだ。
周囲に汗ばむ程の熱が広がり、一瞬で収束する。
僕の胸の辺りから見上げるエアリイさんは、今目の前で起きた事が
理解出来ないのかポカンとした顔をしていた。
そっと抱き寄せ、長い耳に口を寄せて囁く。

「大丈夫、エアリイさんには傷一つ付けさせないから」

視線を外しアイツを睨み付ける。

今の芸当を見て分が悪いと悟ったのか、こちらを警戒しながら撤退
を始めようとしていた。

逃げられるとも思ってる？

エアリイさんを傷付けようとした報いは受けて貰わないとね。

出来る限り苦しんで死ぬような魔法がいいなあ。

暗い思考を巡らせていると、一つの魔法が脳裏に浮かぶ。

ある程度離れて大丈夫だと思ったのか、アイツは背を向けて駆け出
す。

その背中へ落とすように、僕は呪詛を呟いた。

「ノスフェラート」

言い終わると同時、アイツの周囲に紫色の暗い炎が浮かび上がる。
人の頭程の大きさを持つ炎は五肢に喰らい付くようにアイツへ殺到

した。

叫ぶ間も与えられないまま、暗い炎が全身を喰い尽くす。吸血鬼の名を冠するこの魔法は、死を与えながら『死』という安息を許さない。

永遠に近い時を掛けて少しずつ魂を喰らい、耐え難い苦痛を最期の時まで与え続ける。

しかも、喰われた魂は転生の輪廻には戻れず永久に失われるんだ。不意に、腕の中で震える動きが生まれる。

視線を下げると、僕の腕に抱かれたままのエアリースさんと目が合った。

見上げる瞳にはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

怖がらせちゃったかな？

出来るだけ優しく声を掛ける。

「エアリースさん、怪我は無いかな？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。ユーリ君こそ平気かい？」

「うん、僕は大丈夫。……良かった、エアリースさんが無事で」

ほっとした途端、強烈な眠気が襲ってきた。

そのまま後ろにパタッと倒れ込む。

少し赤みが差してきた青い空が広がっていた。

瞼を閉じる直前に浮かぶのはエアリースさんの事。

情けない所もえっちな所も、怖い所も見せちゃったなあ。それでも嫌われちゃっても、エアリースさんが無事だったから……いっか。

色々悩みが増えました。

山賊騒動から2日。

とある理由で僕の精神力はガリガリ削れてきている。

1つは自分の責任というか、僕が受け止めなくちゃいけない事。

あの時僕は、僕の意志で、1人の人間を殺した。

それも正当防衛なんかじゃない。

小さな子供が蟻を踏み潰すみたいに、僕は人間の命を弄んだ。

単に殺した訳じゃない、僕が思い付く最も残虐な方法で殺したんだ。

それを思い出す度、胃から酸っぱいものが上がってきて、胸の辺りが酷く病む。

やっぱり、ゲームみたいには慣れないなあ。

ゲームの中なら襲ってきた山賊の身包み剥いで頭にプスプス弓矢撃ち込んだり、スタアアアアップ！してきた衛兵を沈静化した後で背後から斬りつけたりしてたんだけどなあ。

まだ魔法だったから良かったけど、もし剣なんかで殺していたら、手に残る肉を断つ感触に眠れない夜を過ごしていたはずだ。

異世界だから法で罰せられる事は無いけど、だからって割り切れるものでもない。

時折込み上がる酸っぱい液に辟易しつつも、どうにか折り合いを付けなくちゃ、とも思う。

ただ塞ぎ込むだけの暇が無い事は幸いかもしれない。……最も、それが僕の精神力を削り取っていくもう1つの理由なんだけど。

「どうしたんだい、ユーリ君？ 疲れているなら少し休むといい、それにユーリ君が望むなら……その、添い寝くらいならしてもいいよ？」

「ユーリ、お腹空いたの？ 私がクッキー食べさせてあげるね それとも……口移しの方がいい？」

教会の居間で椅子に座る僕に、背後からエアリイさんがぎゅっと抱き付き、膝の上に乗ったミナがむぎゅむぎゅすり寄っている。

エアリイさんは先日山賊騒動の時に取った僕の行動 偶然にエアリイさんの命を救ったパイタツチ のせいで、何故か好感度が鰻登りになっている。

曰く、命の恩人だからって事だけど、エアリイさんも僕の命の恩人なんだけどなあ。

それを指摘したら『ふふっ、お揃いだね』なんて顔を朱く染めて言うもんだから、僕のHPは赤ゲージですよ。

どうやらこの世界のエルフ族は、命を救ってくれた人に一生尽くすらしい。

それも一族のしきたりじゃなく、遺伝子に刻まれた本能に因るものだとか。

以来毎日……といっても2日しか経ってないけど、エアリイさんは僕の側を離れようとしなない。

それを見たミナが対抗心を燃やして、僕に引つ付いて離れない。

流石にトイレに行く時とお風呂に入る時は付いて来ないけど、それ以外はずっと一緒。

加えておはようのキスとおやすみのキスをねだってきた。

余りにかわいかったから二つ返事で了承したのはナイショだ。

そんな訳で、今僕の後ろを付いて回るピク ンが2人。

まあ2人共かわいいし癒されるからいいか、って思い始めた。

ただ、1つ問題が。

「……………じー」

正面から感情の読み取れない三白眼で僕を見据える少女。

シーナだ。

修道女らしく貞操観念がしっかりしてるせいか、僕がデレデレしてるのがお気に召さないようだ。

もつと健全な男女の関係を築いて欲しいみたいだけど、そもそも2人と男女の關係にすらなつてないし、この2人に抱き付かれて反応しないのは年老いた人だけだと思う。

それでも妹のミナと友人のエアリィさん、2人の恩人　僕自身に自覚はないけど　という事もあつてか、余りキツくは言つてこない。

代わりに、じつと何か言いたげに僕を見据えてくるんだ。

シーナもかわいいから別に見られる分にはいいか、つて最初は思つてたけどコレはなかなかキツイ。

「あの、シーナ？」

「なんですかユーリさん」

「……………なんでもないです」

取り付く島もない。

それも目が乾いて痛くなるんじゃないかってくらい僕を見ながら。若干怖いですヨ。

「シーナ君、そう目くじらを立てなくてもいいんじゃないか？」
「そうだよ、ユーリ悪い事してないよ？」

援護射撃をしてくれる2人。

その気持ちはありがたいんだけど、出来れば抱き付きながらは言わないで欲しい。あぁっ、シーナの僕を見る目が濁ってる！濁ってるよ！

誰でもいいからこの状況なんとかしてくれないかなあ。

そんな風に早くも他力本願な僕の願いが届いたのか、来客を知らせる鐘が響いた。

「あ、はい。すぐ行きます」

いつもの表情に戻して玄関へ向かうシーナ。

うん、やっぱりいつもの方がかわいいよ。

そんな事を考えてると、後ろから耳に熱い吐息を吹きかけられた。

「うひいあ!？」

「酷いなユーリ君、私にはその熱い目を向けてくれないのかい？」

そう言ってご自慢のCカップおっぱいの谷間に僕の頭を埋めるエア
リイさん。

むにむに、ふによふによ。

なにやら幸せな感触が首や後頭部を包み込む。

そして顎を僕の頭に乗せて凭れ掛かる。

いや、もうデレデレですねエアリイさん。

もう喋り方にしかクールキャラ残って無いですよ。

意識を背後に向けていると、胸元にもぞもぞした感触が。

見るとミナが僕のYシャツの中に潜っていた。

流石に先日の格好は恥ずかしかつたので、今の僕の格好は無地の白Yシャツに濃紺のスラックス。

スラックスはぴったりサイズなのにYシャツはかなり大きめで、仕方なくダボつとさせて着ている。

袖も捲ってみただけど動きにくくて、なんでこのサイズなんだろうかと麻袋片手に悩んだけど、今ならその理由が解る。

「ぶはつ。にへへ、ユーリとみっちゃく」

2つ目まで開放したボタンの辺りから頭だけ出したミナと目が合う。僕のシャツの中に潜り込んで密着してるんだ。

確かにぴったりサイズだったらYシャツがパツンパツンになって苦しくなってただろう。ゆったりサイズだからミナがこうして入っても丁度良いくらいだ。

しかも今日は日差しが強いからみんな服は薄手。

ミナも薄いベージュのTシャツを着てるから、柔らかいふにふにや擦れると堅くなるさくらんぼの感触が直に伝わってくる。

落ち着くんだ僕、落ち着くんだ息子。いつ如何なる時も平常心を保つのだ。

出来るだけ意識を逸らしながら必死にうる覚えの般若心経を唱える。

と、ミナがくいつと体を伸ばして僕の唇を奪う。
一瞬で思考が止まった僕に、とろけるような笑みを見せるミナ。

「……にへへ、ユーリ大好き」

がらがら。どんがらがっしゃーん。ばりばりばり。きゅーん。
そんな音を立てて僕の平常心は脆くも崩れ去った。

いやね、この素敵な天使を相手に平常心を保つだなんて土台無理な話なんですよ！

思わずむぎゅーっと抱き締めようとした所で、部屋の扉が開く。

「ユーリさん、あなたにお客様……」

「……あ」

一気に部屋の温度が氷点下まで下がった気がした。

がつ×にち、はれ。

きょうは、おそとがはれてるのに、かみなりがおちました。

……ゴメンナサイ、取り乱しました。

いやあ、流石にシーナも我慢の限界だったみたいで遂に雷が迸ったね。

いつものように　これがいつもと表現されるのも問題な気がするけど　床に正座してシーナのお説教を受ける。

今回はミナとエアリイさんも正座だ。

シーナの後ろで所在無さげに頬をポリポリ搔いている男の人も、余りの剣幕に口を挟めない様子。

「聞いているんですか、ユーリさんっ」

「は、はいっ!」

「あ、あの、シーナ君?」

「なんですかエアリイさん。お説教はまだ終わってませんよ」

「あうっ、い、いや、その」

「言いたい事があるならハッキリ言っ!」

「は、はいっ!後ろの方が困ってますっ!」

「へっ?」

シーナの三白眼に気圧されながらも、背後を指差すエアリイさん。

うん、怯えた子猫みたいで保護欲をそそるけど、人を指差すのは失礼になるから止めようね。

慌てて振り返るシーナから見えないように頭を撫でてあげると、エアリイさんはくすぐったそうに目を細めた。

「ええつと、宜しいでしょうか?」

「ああっ、申し訳ありません!すっかりお待たせしてしまっ!」

「いえいえ、とんでもない。……それでは、貴方がユーリ殿でしようか?」

人懐っこそうな笑みを浮かべる男の人。

紫紺の髪に眼鏡、細面で柔和な顔に全身から滲み出る苦勞性の

オーラ。

あ、なんかこの人と友達になれそう。

灰色のローブを着てるし、学者か魔術師かもしれない。背格好は僕よりちょっと高め。……ちょっとだからね！

「はい、僕がユーリです。あなたは？」

「申し遅れました。私は魔術師ギルドの者でナカシユといいます。どうぞ宜しく」

そう言つて腰を折るナカシユさん。

僕も慌てて頭を下げようとしたらナカシユさんに制される。

「そのまま構いませんよ。……今動いたら悶えますよ、きっと」

右を見ればお説教が終わつたと喜んで立ち上がるうとしたミナが、顔を苦悶に歪めて倒れていた。

ああ、その表情もかわいいなあ。

なんかゾクゾクきそう……じゃない、アブナイ性癖に開花しそうだった。

ずっと正座してたから足の感覚無いなあ。

これで立ち上がったら間違ひ無く倒れて頭ぶつけるね。

目に涙を溜めてうるうるすると僕を見上げるミナ。

ああっ、ゴメンよミナ。僕にはどうする事も出来ないんだ。いや、よからぬ意味でならどうか出来るけど。そんな目で見上げたら襲っちゃうよ？……だから息子よ、お前の出番はまだ先だ。収まっていなさい。ハウス！ゴーホーム！

「どうも、お見苦しい所をお見せしました」
「いえいえ、こんなに素敵な方々に囲まれて羨ましい。……大変で
しょう？頑張って下さい」

最後の方は僕にだけ聞こえる音量で喋るナカシユさん。
良い人だ。気遣いが心に沁みるなあ。

来客用の部屋に移ってまったりとお茶をすすりながらのお話。
教会が広いから部屋は有り余ってるんだ。

シーナとミナとエアリイさんは黙って僕とナカシユさんの会話に耳
を傾けている。

ミナとエアリイさんの頭に真新しいたんこぶがあるのが痛々しい。
げんこつ1発でお説教は無しにしてもらえたみたいだけど、エアリ
イさんまでげんこつ落とされるとは思ってたよ。

朝早くにミナが焼いてくれたクツキーをかじりながら、ナカシユさ
んに尋ねた。

「本題に入る前に幾つか質問したいんですけど、いいですか？」

「ええ、勿論。ただその前に1つお願いしたい事が」

「なんですか？」

ナカシユさんは頭をポリポリ掻きながら苦笑いを浮かべて言った。

「お恥ずかしながら、余り敬語には慣れていませんので良ければお

互い気楽に喋りませんか？」

よっぽど頭の中が平和な人か、それとも凄腕の諜報員じゃなきゃ、こんなまったりした空気は出せないよなあ。

僕としては平和な人って考えて起きたいけど、初対面でこれだけ空気を緩ませるっていうのも不思議な事なんだよ？

横目で伺ってみるとエアリーさんだけがその事に気付いた様子で僕を見ていた。

まあエアリーさんがいれば大丈夫かな。

「うん、了解。ナカシユって呼べばいい？」

「ああ、それで構わないよ」

「じゃあ早速だけど、ナカシユ」

僕の言葉に身構えて背筋を伸ばすナカシユ。

……聞いたら多分、一気に脱力するだろうなあ。

僕の考えが伝わったのか、3人共ちよっぴり口の端がニヤニヤしてる。

「魔術師ギルドって何？」

「……は？」

その反応がツボに入ったのか、シーナは顔を背けて口元を手で隠し

ぶるぶる震えている。エアリイさんは頑張ってお茶を口に運ぶけどカップがカタカタ震えている。ミナに至っては普通に座ってるように見せてテーブルの下に左手を伸ばして僕の膝をバシバシ叩いている。いやまあ、僕に取っては当然の疑問なんだけど、みんなにしてみたらギヤグにしか思えないんだろうなあ。

そう言えばシーナはギルドについては説明してくれなかったなあ。

まあシーナも関わる機会がほとんど無いみたいだし。

気を取り直したナカシュが説明してくれたのはこんな感じ。

魔術師ギルドは、この大陸だけじゃなく他の大陸にもあるかなり大きなギルド。

細かい所は各大陸で違うけど、魔術を悪用させないよう魔術師をまとめて、みなで便利な魔術や人の役に立つ魔術を研究しましょう、ってギルドらしい。

有事の際、魔術師ギルド所属の魔術師は市民の救出や怪我の治療、瓦礫の撤去作業なんかをするけど戦争に参加したりはしない。

ギルド所属の魔術師には毎月の手当てと国営の宿泊施設やギルド直営の魔導書店なんかで多少割引してもらえる。

と、そこまで聞いてちよっとした疑問が湧いてきた。

「ナカシュ、魔法と魔術と魔導って何が違うの？」

「ああ、簡単な事さ。魔術は魔力を使って火を出したり水を出したりする事、魔法はその水を出す時に用いる理　つまり方法、魔導は魔力をどう扱えば魔術を行使出来るかの指針。それを理解してきつちり分けて話すのはギルドの老人達しか居ないけれど」

「じゃあ魔法使いや魔術師や魔導師も別物？」

「その通り、魔術師は行使出来る魔術の種類が豊富な人、魔導師は扱える魔力が普通よりも多い人、魔法使いはちよっとした魔術が使

える人だね。基本的には魔法使いが成長して魔術師か魔導師になる
って思ってくれればいいよ」

なるへそ、雑多な呼び方じゃなくちゃんと分類されてたんだ。

さて、諸処の疑問が解決された所で、いよいよ本題に入るとしよう
か。

「ねえ、ナカシユ。僕を尋ねてきたって事だけどさ」

「ああ、その事なんだけどね、実は」

「なんで僕がこの村に居るって知ってたの？」

話を進めようとするナカシユを遮って、僕は言葉を続けた。

そう、一番気になってたのはそこなんだ。

僕がこの世界に来てからまだ一週間も経ってない。

なのにナカシユは僕の存在を知っていた。聞けばナカシユは首都『
リレジー』から来たって言うし。

リレジーからここタマタ村までは早馬で1日、普通の馬車でも3日
掛かる。

考えられるのは僕の事を村長さんが「こんな人を保護しましたよ」
って届け出たのを、どんな人が確認しに来たって所だろう。

でもそれなら王国の衛兵や警備隊の人が来るはずだし、わざわざ魔
術師ギルドから人を寄越す理由が解らない。

僕の視線を受け止めて、ナカシユは事も無げに話し始めた。

「こちらの村長から報告を受けてね。怪我をした旅人を1人保護し
た、と。別にそれだけなら警備隊の人達に任せておくんだけど、上

司の気紛れで派遣されてね」

「気紛れ？」

「村長の報告書を読み上げた新入りが、突然現れただなんて転移でもしてきたんスかねえ、なんて言うもんだから上司が興奮しちゃって。事実関係を確かめて事の次第に因つてはギルドに勧誘、いや拉致してきなさい！と言いついてね。それで私が派遣されて来たんだよ」

「うわあ、また滅茶苦茶な。」

上司の言う事も滅茶苦茶だけど、それに従ってここまで来たナカシユも色んな意味でひどい。

ああ、だから苦労性なオーラが出てたのか。

しかしこれは参つたなあ、と僕は頭を抱えなくなる。

確かに突然現れたのは事実だけど、聞く限り転移魔法はかなりの難易度らしい。もしかしたら伝説級の魔法かもしれない。

そんな中「実は転移しちゃって」なんて言おうもんなら、間違い無くその上司のオモチャにされる。

気は進まないけど、僕は嘘を吐く事にした。

「まあ、ある意味転移はしたみたいなんだけどね」

僕の言葉に顔色を変えるエアリイさん。

大丈夫、と1つ頷いて言葉を続ける。

「元々僕は拾われっ子でさ、爺ちゃん　僕を育ててくれた人が魔術の研究しててね。多分術の失敗で転移というか、吹き飛ばされた

んだと思うよ」

「術の失敗で、という事はかなり大掛かりな術を？」

「らしいよ？」

「随分と曖昧に喋るね」

「僕は魔術について余り知らないし、もっぱら爺ちゃんの身の回りの世話をしたからね。得意なんだよ？鳥を焼いたり野菜を炒めたり」

得意と言いつつ敢えて料理が上手そうに思えない言い方をする。

事実そこまで料理する訳じゃないし。

けど、こういうちょっとした搦め手が後々効いてくるんだ。

「ならどの辺りに住んでいたとか、どうやって戻るのがとか、何か当ては有るのかい？」

「全く。住んでいたのは暗い森の中だったし、爺ちゃんに聞いた事も無かったなあ。おかげで帰り方も解らない状況だよ」

「余程君のお爺さんは変わった方のようなだね。だけど失敗の結果とはいえ1人でそれだけの術を作ろうと言うんだから、実力も折り紙付きなんだろう。どうだい、魔術師ギルドの方で君のお爺さんを探してみようか？君さえ良ければ魔術師ギルドで君を保護してもいい。その方が早く戻れるかもしれないよ？」

きたか、と身構える。

僕の話を全部信じた訳じゃないだろうけど、仮にそんな人がいるなら是非とも接触しておきたいハズ。

それに僕の身柄を魔術師ギルドに置いておけば、将来僕を迎えに来る時に会える。

僕には魔術師ギルドからの保護という形で給金や情報提供が入るから、今考えられるデメリットは皆無に等しい。
さあ、どうやって切り抜けるか。

このやり取りにちよつとワクワクしながら、僕は口を開いた。

「探してもらえるならありがたいけど、魔術師ギルドはなんか怖そうだね」

「おや、なんでそう思うんだい？」

「だって人間を1人拉致してこい、だなんて普通に言えちゃうような人が上司なんでしょ？そんな人身売買みたいな事を平然と言えちゃうなんて、やだよ」

軽く身震いしてみせると、ナカシユはしまった、って顔を歪めた。
上司も冗談で言ったと説明しても不安と不信が残りそうな反応を見せる僕に、なんて言えばいいのか解らないようだ。

僕、ひよつとして役者になれるかも？

妹に付き合つてよくごっこ遊びをした経験がこんな所で役に立つなんて。

妹よ、お兄ちゃん俳優デビューしちゃうかもしれない。

あ、妹の事思い出したらちよつぴり涙が滲んできた。

いけないいけない、心を強く持たないと。

ただナカシユは僕の涙を勘違いしたのか、慌てて取り繕い始めた。

「ああ、無理には言わないよ。魔術師ギルドには変人が多いから、私の方から余りユーリには近付かないよう言い含めておくから」

そう言っつてチラリと左右を伺う。

何を……ああ、なるほど。

テーブルの左では僕の涙を見たエアリイさんが刺すような視線を向けて、僕の右ではミナがほっぺを膨らませて睨んでいる。

ミナかわいいなあ、そのほっぺにキスしちゃうぞ？

邪念を振り払いつつ、僕は次の一手を指す。

「最初に目が覚めたのがここだし、余り場所を移さない方がいい気がするんだ。ほら、山で遭難した時とかも無理に歩き回らないでその場にいた方が早く発見されるって聞くし」

「それはそうかも知れないけど」

「それにさ」

なおも食い下がるナカシユに奥の手を使う。

といつてもやる事はそんなに無いけど。

ミナの体をひよいと持ち上げ、僕の膝の上に座らせる。

勿論後ろからむぎゅ〜のおまけ付きだ。

ミナはちよつと驚いたみたいだけど、僕の意図を読み取って甘えてくる。

「好きな子の側にいたいなあ、って思うのはいけない事かな？」

その言葉にぽかんとするナカシユ。
毒気を抜かれたのか力無い笑みを浮かべて頭を振った。

「……解った、一応こちらでもそのお爺さんの事は調べてみるけど、必要以上に干渉はしないよ。上司には上手く私から伝えておくよ」

「ありがとう、ナカシユ」

「気にしないでいいよ、慣れてるから」

そう言つてナカシユは席を立った。

玄関まで見送りに行つて、トボトボ歩くその背中を見ていると何故か悪い事をしたような気持ちになる。

多分、上司の人に振り回されてるんだろうなあ。

話を聞く限りやんちゃな幼なじみタイプだよね、上司の人って。
ツインテールで縦ロールなんだろうか。

居間に戻つてソファーに腰掛けて脱力する。

ふひー、と大きく息を吐いたら一気に全身がだるくなった。

やっぱり慣れない虚勢は張るもんじゃないね。

来客用の部屋の後片付けを終えたミナがとことこやってきて、だらしなく体を投げ出している僕の上にはむっと乗っかる。

紫銀の柔らかな髪を優しく撫でると、甘えるように抱き付いてきた。

「さっきはゴメンね、ダシに使っちゃって」

「ううん、私の体も心もユーリのものだから、好きに使っていいん

だよ？」

お待ちなさいお嬢さん、その台詞は非常に危険です。

そんな幸せそうにとろけた顔をしちゃいけません！僕の理性が壊れちゃうでしょ！

と、頭に2つの柔らかい感触が。

上から肩に手を回され抱き締められる。

「ユーリ君、私の事も忘れてくれよ？私だって君になら全て奪われても構わないんだから」

「むく、エアリイさんはユーリをゆうわくしちゃダメ！」

「おやおやミナ君、独り占めはするいよ？」

「エアリイさんは私より大人なんだからガマンだよ」

「ならガマンした分ミナ君が寝てから、私はユーリ君と大人な時間を過ごそうかな？」

なにやらバトルが始まったけど、2人にはケンカして欲しくないなあ。

しかも原因が僕って……いやあ、異世界トリップして良かった。

しみじみ思いつつ、僕は体を起こしてミナを左手で抱き寄せ「わあっ」「エアリイさんの右手を掴みぐるつと回すようにして」「うなっ」「腰元の辺りに座らせる。

驚いた声を上げる2人の頭を撫でながら、ゆっくり諭すように言った。

「2人ともケンカしちゃうだよ？一緒に仲良く笑ってるのが一番い

いし、2人が仲良くしてるのを見ると、僕も嬉しいからね」

「にへへ、はあ〜い」

「ユーリ君にはかなわないな……ふふっ」

うんうん、お兄さん聞き分けのいい子は大好きですよ。

え？解決方法がヘタレ？

ハハッ、何を今更。

本当は自分の気持ちを整理して、本気で2人の気持ちに向き合わないといけない事くらい、解ってるつもり。

だけど僕にはそんな度胸も甲斐性も無いし、なにより、

愛しいって気持ちは解るけど、好きってどんな気持ちなのかな

……。

恥ずかしながら齢15にして、まだ初恋の1つも経験してない。

正直2人が僕に向けてくれる好意も、イマイチ実感が湧かないって
いうか、なんだろう。自分でもよく解んないや。

えっちな気分になる事はよくあるけど、それで突っ走って傷付けち
やうのは絶対に嫌だし。

……冷静に観察したら僕って本当にヘタレでチキンだなあ。

おっと、また思考が沈みがちになってたよ。

ちょっと下がった気分をごまかすように2人の頭を撫でる。

「ユーリさん」

びくうっ！と僕の体が跳ねた。
ギギギと錆び付いたロボットみたいな動きで振り返ると、そこには
聖母のような微笑みを浮かべたシーナが。
あぁっ、微笑みは素敵なのに、おでこに血管浮き出てるよ！バツテ
ンが、バツテンが浮き出てる！

「そういえばまだユーリさんはお説教の途中でしたね。……ミナ、
エアリイさん、ちょっとユーリさんを借りていきます。文句は無い
ですよ？」

夜叉のような凍える声に顔を青くしてブンブン首を振る2人。
僕は首根っこを掴まれて、廊下を引きずられて行く。
勿論BGMはドナドナだ。

「あ、あの、シーナさん？」
「ふふふ、なんですかユーリさん？階段を上りますから、喋ると舌
噛みますよ」
「ちょ、それは死んじゃう、死んじゃうよ！？だ、誰か、ヘルプミ
ー！」

やたら広い教会の中に僕の悲鳴だけが虚しく響いた。
後で村の子達に聞いたら、この時の叫び声は教会の七不思議に数え
られていて、言う事を聞かない子は連れて行かれちゃうって母親に
言われたらしい。

以来、子供達は母親の言う事をよく聞くようになったとか。
めでたくないけど、めでたしめでたし。

チャンチャン。……いや、本当に怖かったです。

お勉強の時間、魔法編。

激動の午前が過ぎ、お昼ご飯を食べ終えまったりとしたティータイムへ。

今日のお昼は僕が作った。

といっても簡単な蕎麦だけだね。

四次元麻袋から出て来たのは蕎麦の袋と鳥の胸肉、ネギ、七味、めんつゆ、それと便座カバー……じゃなくて、ぴったりサイズのYシヤツ。

なのであのタイミングで出て来たのかさっぱりだけど、取り敢えず着替えてレツクツキング。

みんな蕎麦を見るのが初めてみたいで興味津々だったけど、温かい蕎麦を気に入ってくれたようであれよあれよという間に5人分茹でた蕎麦がつゆ諸共綺麗さっぱり無くなった。

ミナは初めての蕎麦に舌鼓を打って大満足、エアリイさんは猫舌なのかふーふー冷まして食べていた。

蕎麦を食べるエルフ……なんだろう、すごい光景だ。

一番蕎麦が気に入ったのはシーナで、僕よりも食べていたのにはちよつとびっくりした。

七味もたっぷり振り掛けてたし、案外辛党なのかな？

機嫌も直ったようだなによりだね。

食後のティータイムには蕎麦茶をご馳走。

これも気に入ったみたいで、珍しくシーナのにへらって顔が見れた。うん、普段見れないだけあってすごくかわいい。

ミナは村の子供達と村長さんの所で勉強会、エアリイさんは狩りをしに森へ入って行った。

僕はというと、シーナとマンツーマンで魔法についての特別授業。

今の所知ってるのファイヤーとライブだけだしね。

「では授業を始めます」

「シーナ先生、よろしくお願いします」

「解らない所があったらどんどん質問して下さいね」

蕎麦茶片手にご機嫌なシーナ。

いつもより若干ノリノリだ。

「まず、魔法には大きく分けて3つの種類があります。ユーリさん、なんだと思いますか？」

おおう、いきなり当てられた!?

何だろうね、魔法の3つの種類って。

パツと思いつくのは攻撃、回復、補助辺りかな？

元気良く手を挙げてシーナに答える。

「はい、シーナ先生！」

「はい、ユーリさん」

「攻撃、回復、補助の3つだと思います！」

「なるほど……そうきましたか。確かに役割で考えるとそうなりま
すね」

ありゃ、って事はハズレか。

ん、シーナが考える別の答えて種類が3つあるやつ……。……。
何だろ、解らないや。

あ、もしかしてこの世界では3つだけど僕にしてみたら3つじゃないとか？

例えば……そう、魔法の属性とか。

「はい、シーナ先生」

「はい、ユーリさん」

「魔法の持つ属性……かな？」

「大正解です、どんどんぱふぱふ」

拍手してくれるシーナ。

前に教えたどんどんぱふぱふがこんなに破壊力あるとは思わなかった。

余りのかわいさに鼻血が出そうになる。

とうかここまでテンション高いのは蕎麦茶のおかげか。恐るべし、蕎麦の力。

「では更に問題です、その3つの属性とは何でしょう？」

そう言っ僕顔を上目遣いに覗き込むシーナ。

ああもう、なんでこの姉妹はこう色々とクリティカルなんだ！

邪念混ざりまくりな煩惱ヘッドで答えを考えてみる。

多分だけど、魔法の名前がFEちつくだから理、光、闇なんじゃないかなあ。

「理、光、闇の3つ？」

「すごい、正解です！ひよつとしてユーリさん知ってました？」

「合ってたんだ。たまたまだよ、僕の世界にある物語に確かそんな表現があつたなあって思い出してさ」

「へえ、今度その物語教えて下さいね？こほん、ユーリさんが正解した通りこの世界の魔法は理、光、闇の3つで構成されています。内訳は解りますか？」

「うん、なんとなく。ファイヤーが理魔法、光魔法にはライブも含まれるのかな？」

「その通りです。光魔法には変則的ながら治癒や解毒、精神への干渉も含まれています。理魔法は解りやすいですね、火や水、雷に風なんか該当します。闇魔法はちよつと難しいんですけど……」

言いにくそうに言葉を区切る。

イメージからして禍々しそうだし、聖職者のシーナにはちよつと苦手意識もあるのかな？

この世界でいう闇魔法に、先日僕が使ったノスフェラートも分類されるかな。

だけど闇魔法って分類がそもそも間違ってるよね。

その辺りをシーナに提言してみた。

「闇魔法の位置付け、ですか？」

「うん。そうだなあ、例えばさ、シーナは闇ってなんだと思う？こんな感じ、って程度で良いから言ってみて」

「そうですね、暗くて冷たくて……怖いですね」

ちよつと首を傾げて考えるシーナ。

その仕草も姉妹揃ってとってもかわいらしい。

癒やされながら、僕はシーナの答えにちよっぴり肩を落とす。

「やっぱり、そんなイメージかあ。仕方ないって言えばそうなんだろうけど。」

魔法を使うにはイメージが大切だ。効果は個人の力量に左右されるだろうけど、発揮される効果の方向性は術者が思い描く必要がある。解りやすく言えば、ファイヤーで出す火の勢いは魔力が関係するけど、ファイヤーで出た火が『どんな風に燃えるか』は自分のイメージに左右される。

使う魔法をどう捉えるかで、魔法の効果は変わってくる。

まあ何が言いたいのかハッキリ言うと、あの時僕が使ったノスフェラート、あれを僕は闇魔法として使ってない。

つまり、僕はこの世界の法則を無視した魔法を使った事になる。

どうやって、何を、どのように、使ったのか。

多分、僕とシーナの捉え方の違い　闇に対するイメージだけに止まらない相違　に、ヒントがあるんじゃないかって思う。

そんな漠然としたモヤモヤを抱えて、僕は口を開いた。

「僕の闇に対するイメージ……考え方は、シーナとだいぶ違うね」

「ユーリさんはどんな風に考えてるんですか？」

「僕の思う闇は……暖かいよ」

「暖かい？」

ぽかんと呆けたような顔をするシーナ。

そりゃそうだろう、自分が思っていたイメージとほぼ180度違う

答えが返ってきたんだから。

「シーナは闇を考えた時、光の対極にあるものって想像したんじゃない？」

「ええ、だって光と闇は相反するものなんじゃ」

「そこから変えてみよっか」

「ふえ？」

「まず光の対極にあるのは闇じゃない。光の反対側にあるのは、影なんだ」

「影……ですか？」

「そうそう、光があるから影が出来るし、影があるって事はどこから光が差してるって事だよな？」

「なるほど、言われてみればそうですね。でも光と相反するものが影なら、闇って何なんですか？」

よしっ、食い付いた。

知識や発想を教えるのに一番の近道は、疑問と興味を持ってもらう事。

それが出来たら、後は互いの気が済むまで持論や疑問をぶつけ合えば良い。

「それなんだけど、僕は『闇』っていうのは万物の祖……全ての母親なんじゃないかな、って考えてるんだ」

「母親？」

「そう、例えば人間はどうやって生まれてきたのか、考えた事はある？」

「え、それは神様が人間をお作りになっただんじゃないんですか？」

「修道女のシーナらしい答えだね。それも答えの1つだと思っよ」
「答えの1つ、ってユーリさんの考えは違っんですか？」
「僕の世界では神様を持たない人達も多くてね」

僕の言葉に驚いた顔をするシーナ。

「神教が世界に広く布教されているこの世界じゃ確かに信じられない事だらっなあ。」

「そうだなあ、花を咲させようと思った時に、種を植えるよね。僕の世界の研究者は、全ての生物は種で殖えるって考えたんだ」

「種、ですか。私達人間も種で？」

「うん、肉眼では見えないけどね。詳しく説明すると混乱しちゃうから、概念的に種のようなものって思ってくれればいいよ。その小さな種で人間が殖えるとして、生まれてくる種は誰が作っただらっうね？」

「それは神様じゃないんですか？」

「うん、難しいかもしれないけど一旦神様の事は忘れよう。神様以外で、何だと思っ？」

「神様以外ですか……やっぱり親でしょうか」

「よくできました、その考え方が出発点だよ。じゃあその親は誰が生んだんだらっ？」

「そのまた親ですな」

「そうだね。じゃあそのまた親、更にその親……辿っていったら、一番最初の親は誰になるんだらっ？」

そこまで喋って、僕はカラカラの喉にすっかり冷たくなった蕎麦茶を流し込んだ。

神様というジョーカーを使えなくて、シーナはうんうん悩んでいる。僕自身も、この先を上手く説明出来るか解らない。妹は感覚で理解してくれたけど、論理で納得しようとした両親は最期まで理解出来なかった。何せ説明する側の僕も曖昧な感覚で、こうなんじゃないかって勝手に解釈してるだけだし。なかなか難しいな、って思ってたらシーナが不意にぱっと顔を上げた。

「ユーリさん、ひよつとして……その最初の親が生まれる前は、何も無かったんじゃないですか」

「おおう、よくそこまで辿り着けたね!？」

正直、神様を信じてる人に、僕の世界の知識無しにその発想が出来るとは思って無かった。

中学で習うレベルの地学を知らない人に説明するのは難しいしね。

「僕達の世界では、最初には何も無かったっていうのが常識というか定説なんだ。ある時、何らかの理由で何も無かった所から、生命が、世界が誕生した。その何らかの理由の1つが」

「ユーリさんの世界の神様、ですか？」

僕の言葉を継いでしてやったり顔のシーナ。

先に言われちゃったなあって悔しい反面、僕はシーナの柔軟な発想力や頭の回転の早さに驚いていた。

実はシーナって天才なのかも。

もしかしたら僕の考えを解ってもらえるかな？なんて考えてちよっ

とワクワクドキドキしながら、僕はわざとらしく咳をした。
ここまでは色んな学者や本から得た知識を披露してただけ。
ここからは僕自身の、僕だけの言葉で説明しなきゃ。

「ここからは僕の想像っていうか妄想なんだけど、何も無かった所に『得体の知れない何か』が世界を作ったんじゃない、そもそも何も無かったっていうのが間違いないんじゃないかって、僕は考えるんだ」

「えっと、どういう事ですか？」

「物質的な意味では、本当に何も無かったんだと思う。光や熱、その他思い付くもの全て。ただ、精神的な意味では、何かが存在していたんだと思う」

「精神的な何か……幽霊みたいなものですか？」

「うん。何も無かった場所に神様みたいな存在が世界を作り出したんじゃない、何も無い』っていう存在が自らの意志で世界を生み出したんだ、って僕は思うんだ」

そこまで聞いて、シーナはあつと声を漏らした。
どうやら僕が言いたい事に気が付いたみたい。
本当に賢いなあ、と嫉妬する所が感心しちゃったよ。

「つまりユーリさんは、その何も無い存在を『闇』って考えているんですね」

「大正解。正解した優秀なシーナには後で豪華商品をプレゼントしちゃおう」

「わ、ありがとうございます」

正解した事に喜ぶシーナ。
でも突然怪訝そうな顔をして僕に言った。

「ユーリさんの闇に対する捉え方は解りましたけど、なんで突然そんな事を？」

「いやあ、流石シーナ。そこまで解っちゃうかあ。」

「……いや、多分誰でも気付いたよね。」

「本当はエアリイさんもいる時に言った方が良いんだろうけど、先に一般人代表のシーナの反応を見ておきたい。」

「今のエアリイさんだったらミナみたいになんでも受け入れてくれそうだし。」

「いや、受け入れてくれるのは大変ありがたいんだけど、シーナみたいに僕に対してフラットな感情を持つてる人の意見を聞いて置かないと後々危ない事が起きそうな気がする。」

「また波紋を呼ぶ事になるんだろうなあ、ってどこか他人事のように感じながら僕は爆弾を投下する覚悟を決めた。」

「こないだの山賊騒動の時にさ、僕ファイヤー以外の魔法使ったんだ」

「そうなんですか！？2人共話してくれないから、何かあったのかなとは思ってましたけど、よく即興で出来ましたね？」

「まだ驚くのは早いと思うよ……」

「え、何ですか？」

「いやいや、なんでも。それで山賊相手に多分この世界の闇魔法を使っただけだ」

「や、闇魔法を使ったんですか！？難易度も高く扱うのに初歩のもので数年かかるのに！」

「シーナ、落ち着いて。ここからが一番大切な事だから」

逸るシーナをどうにかなだめて、この日一番の爆弾をポイツチョした。

「……実はそれを使う時、僕は闇魔法として考えてないのにそれが使えたんだ」

「……はい？」

「この世界ではファイヤーを使うにしても、『理魔法のファイヤー』って理解しないと使えないでしょ？」

「ええ、そうですね。……え？」

「って事はさ、僕がいくら頑張っても闇魔法のライブや光魔法のファイヤーは使えないハズだよな？」

「その通りですね。え、え？」

「ゴメン、この世界に存在しない魔法使っちゃったてへぺろ」

舌をちよつと出しておでこに手をぺちんと当てる。

「こらそこ、面と向かってかわいくないとか言わない！」

「……や、かわいって言われてもそれはそれでシヨックだけどさ。」

シーナは頭に？を4つくらい浮かべてたけど、徐々に顔から表情が消えていく。

そしてゆっくりと目が大きく開かれて、もうこれ以上はって所で突然立ち上がって悲鳴のような声を上げた。

「え、あ、それ、えっ、な、あああああああああつ!？」
うん、とっても素敵にパニックってるね。

こういう時は下手に刺激しないで本人が落ち着くまで放っておくに限る。

……決してヘタレてる訳じゃない、うん。だってカップやお皿割れちゃったら危ないし。
まったり蕎麦茶をすすって、シーナが落ち着くまでしばらくティータイムを満喫した。

「うう、恥ずかしい所をお見せしました」
「いやいや、見た事無いシーナの一面を見て楽しかったよ」

はうっ、と小さくなるシーナ。
顔を真っ赤にしつつも、持ってる蕎麦茶は手放さない所がちょっぴりおかしい。

ただまあ、シーナとも話し合ったけど新しい魔法を使えるようになったのは極力ナイシヨにしておく事にした。

エアリーさんは僕が魔法使った時に一緒にいたから話すつもりだけど、ミナには黙っていようと思う。
もしかしたら、それを知ってるせいでミナが危険に晒されるかもしれないしね。

「それにしても、シーナがあんなにびっくりするとは思わなかった」

「驚いて当然じゃないですか！あんな事突然言われたら誰だっけ
つくりしますよ！」

「あはは、そうかもね。でもあわあわしてるシーナもかわいかった
よ」

「……わ、忘れて下さいっ、思い出しちゃダメですう！」

空になったカップを置いてぶんぶん腕を振り回すシーナ。
ゴメンゴメン、と頭を撫でたら真っ赤になって動きが止まる。

「そっ、そんな事してもごまかされませんからね!？」

「困ったなあ、どうしたら許してくれる？」

「……もうちょっと、撫でてくれたら、その……いい、です」

ダメだ、なんかもうかわいすぎる。

慣れない真面目モードで話したせいか、反動でもものすごい甘えたく
なってきた。

耐えきれなくなった僕はシーナをお姫様抱っこしてソファアに座っ
た。

「え、あ、あのっ、ユーリさん!？」

「ああ、気にしないで。かわいいシーナに触れなくなったただけだか
ら」

「かつ、かわ……!？やつ、ダメです、恥ずかしいっ」

わたわたと暴れるシーナを膝の上に座らせて、優しく後ろから抱き

締めた。

あ、髪の毛から良い匂いがするなあ。

くんかくんかすーはーすーはー。

……うん、堪能した。

シーナったら耳たぶまで真っ赤にして、恥ずかしがり屋さんなのかな？

ちよっぴりイタズラしてみたくなった僕は、その真っ赤な耳たぶを甘噛みしてみた。

「ひゃうっ！？あっ、やあっ、あっあっ、んううっ」

やわっこい耳たぶをはみはみする度に、シーナの体がびくびく跳ねる。

面白くなって、僕は耳たぶを甘噛みしつつ、頭を優しく撫でてあげる。

「んやあっ、ユーリ、さんっ、あっ、それダメっ、ダメですう、ふやあ、あっ、ああっ、やあ、私っ、ばかになっちゃいますうっ、ふああっ」

小刻みに震えていた体が一際大きく震え、くてつと力無く僕へ凭れ掛かる。

潤んだ目は虚ろで、時折小さく体が跳ねる。

あれ、これってかなりえっちくない？

意識した途端、下腹部に血液がすごい勢いで流れ込んだ。ま、まずい、落ち着け息子、スタアアアアアップ!?

しかし願ひ虚しく、おあずけばっかりだった息子は僕の言う事なんか聞かずにすたんだっぴ。

ふりふりと揺れるシーナのお尻の間で少年の自己主張を始めた。

「ふわあ……ユーリちゃん、なんだかカタイの当たってましゅ……。なんでしゅか、これえ……。？」

絶頂の余韻なのか、呂律が回らないシーナがお尻を振って何が当たっているのか確かめようとする。こっ、これはまずいっ！
柔らかなお尻の感触がとっても気持ち良い。

「ちよっ、待ってシーナっ!？」

「カタイのこしゅれて、きもちいいれしゅう」

なんて淫乱な。お兄ちゃんそんなえっちな娘は大好物ですよ！

違う、間違えた。

今のはナシでっ！

というかパニックってないで早くシーナをなんとかしないと、息子のHP的な意味でまずい。

ここはもう一度シーナを気持ち良くしてあげるしかない。

早速僕は耳たぶを口に含み、はむはむもにゅもにゅ甘噛みを始めた。同時に頭を撫で回すのも忘れない。

「んやあ、ユーリちゃん、んあつ、しよれ、らめれしゅう、ふああ
つ」

腰をグラインドさせて妖しく身をくねらせるシーナ。

まるでゲームに出て来るサキュバスみたいに、綺麗でえっちな雰囲気
気を纏ってる。

実は3人の中で一番えっちなんじゃないだろうか。

一番えっちな娘が修道女……シチュエーションだけでもご飯3杯い
けそうなアレだね！

なんて考えたりして、どうにか意識をラグビー部並みのタックルを
シーナのお尻にかまそうとする息子から逸らす。

「ふあつ、やらあ、わらひ、らめになっひやいましゅう、あつ、あ
あつ」

扇情的な声を上げるシーナ。

多分もうそろそろ限界なハズ。

ダメ押しに耳たぶをちゅううつ、って吸い上げる。

その瞬間、シーナは体を大きく跳ねさせて、ぐったりと脱力した。

余りの強い刺激に体が耐えられなくなって失神したみたい。

敏感で淫乱でかわいいなんて最高じゃないか。

シーナをソファアに寝かせて、風邪を引かないようにお腹に薄いタ
オルケットを掛けてあげる。

これでよし。

「……トイレ行ってよっつと」

さあ、僕の強靱な精神力に惜しめない賞賛を浴びせて！

あ、やっぱりいいや。

先にトイレ行ってくるから。

ふう、ただいま。

あの後起きたシーナにジャンピング土下座をして、なんとか許してもらった。

「ユーリさんはえっちなです、けだものです」って涙目で言われてちよっとゾクゾクした……いえ、なんでもありません。

帰ってきたミナは何があったのかなんとなく理解したみたいで、僕の耳に口を寄せて「私ならいつでもイイよ……？」って言ってきたのはびっくりしたよ。

えろえろ姉妹め、食べちゃうよ？

まあ後でご機嫌取りに蕎麦殻の枕とペットボトルに入った蕎麦茶を贈っておこう。

まあ、なんだかんだでシーナとちよっぴり仲良くなれたかな？

閑話 忘れられた集落から。

あたたかい。

最初に感じたのは私を包み込むような温かさ。

優しくそつと回される腕に甘えて、耳を胸に当てると愛しい人の鼓動が、私の鼓膜を、脳を、そして心を揺らす。

彼に名前を呼ばれる度に、私の胸いっぱいには歓喜が広がり心が震える。

ほら、今も私を呼ぶ声がする。

「美由里」

声を聴くだけで、私の心がダメになりそうになる。

ずっと聴いていたい。ずっと触れ合っていたい。ずっとずっと、彼の側にいたい。

彼の手が私の頭を撫でる度、彼の指が私の髪を梳く度、体が、心が融けそうになる。

きつと、この世に生を受けた瞬間から、私の魂は彼を欲していた。彼になら全てを捧げても構わない。

私の体は彼に貪ってもらう為、私の心は彼に弄んでもらう為にある。

だから早く、私の全てを奪いに来て。

そこで目が覚めた。

目に映るのはいつもと変わらない景色。

木と煉瓦で組まれた内壁に真っ赤な絨毯。

魔法の火が灯されたカンテラに照らされて薄く影が伸び、室内を明るく照らして出す。

私の目覚めと共に輝きだした魔法の火が、やや肌寒い室温を一気に常温にまで引き上げた。

枕元に置いた時計が朝の10時を示している。

魔力で動く自動式卓上カレンダーは最後の記憶から約半年先の日を映し出していた。

今回の休眠は短かったなあ、と大きく伸びをする。

ほきほきべきべき。

関節が酷い音を立てる。

「んう、快調快調。にしても随分と懐かしい夢を見たなあ。元気にしてるかな、お兄ちゃん？」

幸せな夢を思い返すと、にへらあってだらしく顔が歪む。

今日は朝から良い気分だ。

思わず鼻歌を歌いながらテーブルの上に置いてある水晶に目を向けると、

「うそっ！？割れてんじゃん！え、えっ、いつ割れたの！？ってこうしてる場合じゃない、行かないと！」

慌てて布団を跳ね退け着替えを箆笥から取り出しパジャマを脱ぎ捨てる。

ちゃっちやと着替えて割れた水晶を片付け、急いで部屋を飛び出し

た。

あの水晶は『招きの水晶』って呼ばれるマジックアイテム。所謂魔具の一種なんだけど、ちよつと特殊な性能を持ってて普通の人には扱いにくい。

魔具は使用者が魔力を込める事で効力を発揮するけど、招きの水晶は使用者の想いを消費して発動するタイプの魔具だ。

逢いたいって想いを毎日込めて水晶を想いでいっぱいしたら、水晶が割れて想い人を呼び出す事が出来る。

普通だつたら会いに行つた方が早いし、相手の都合に関係無く呼び出すもんだからイマイチ使い勝手は宜しくない。

でも私にはこれ以上無い至高のアイテムだ。

なにせ本来なら二度と逢えないハズのお兄ちゃんに逢えるというチートアイテムだからね。

長い回廊を右に回ると1人の女性がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

背が高くスラツとしてモデルさんかつてくらい足が長い。

それでいて体の要所は女性的な丸みを帯びていて悩ましげだし、胸は大きいし　　ありゃFは間違いないわね。

切れ長で睫毛の長い赤い瞳と、腰まで伸びる長い緑銀のサラサラな髪の毛が相俟つてエキゾチックジパング……いや、少なくとも日本じゃないか。

まあ要約するとスゴイ美人な近所のお姉さん、って雰囲気だ。

私とお揃いの赤いローブを着てるけど、本当にお揃いなのか？ってくらい輝いて見える。

やっぱり素材が良いと服も違って見えるのね。

彼女も私に気付いたようで、甘い微笑みを浮かべて小さく手を振る。

「あら、ミューリちゃんおはよう。休眠してる間お話出来なくて寂しかったわあ。……って、あ、あら？待ってミューリちゃん、私そんなに早く走れないわよあ」

上げた手をむんずと掴まえてそのまま駆け抜ける。

普段なら抱き付いて甘えたい所だけど、今は一大事。

お姉ちゃんに付き合っただけでいいわよ。今日は一日がくれちゃうよ。

迷路のように入り組んだ回廊を走りながら、掻き摘んでこれからの事を話しておく。

「お姉ちゃん、起きたら水晶が割れたの！」

「まあ、じゃあ遂にミューリちゃんのお兄さんがこの世界に？」

「そうなの、今から迎えに行くから長老に許可もらいに行くよ！返事は聞かないけどさ」

「でもそれって許可もらった事になるのかしら？」

「いいのよ、本人知らない間に抜け出して事後承諾にするより良心的でしょ？」

「わあ、ミューリちゃん優しいのね 良い子に育ってお姉ちゃん嬉しいわ」

お解り頂けたらどうか。なんちって。

この短い会話で充分解る通り、お姉ちゃんはちよつとのんびり屋で天然で良い人。

これで私達の中で一番頭が良い天才って言うんだからびっくりだよね。

何度目かの角を曲がると、やけに荘厳な雰囲気醸し出している扉が見えた。

お姉ちゃんの手を離し更に加速して、勢いを殺さずに両足で踏み切りドロップキック。

「たのもー！」

「ぶべらぐあっ！」

思いつ切り開かれた扉にぶつかり何か吹き飛んだ気がするけど気にしない。

ゴロゴロ転がって体勢を整える。

すくつと立ち上がって椅子に座って気ままにお茶を飲んでいた禿げ上がったお爺さんに言い放つ。

「という訳で、ちよっくら行ってくるわ！」

「ミューリちゃん、それじゃ誰も解らないわよお？ほら、長老固まつちやつてる」

「そう？でもお姉ちゃんは解ってるからいいんじゃない？誰にも解らないのにお姉ちゃんだけ解るなんて、流石お姉ちゃん頭良い！」

「つぶぶ、ミューリちゃんに褒められちやつたあ」

わあい、と2人で仲良くハイタッチ。

……はっ！？いけないいけない、お姉ちゃんワールドに引き込まれちゃった。

お姉ちゃんと会話するところちまではわぼわしてくる。

と、さっき吹き飛ばされた衛兵のおっさん……ああ、いけない。綺

麗な言葉を使わないとお兄ちゃんに「めっ」ってされちゃう。衛兵の綺麗なおっさんが近付いてきた。

「待てミューリ、一体何処へ行くと言うんだ」

「決まってるじゃない、前世から結ばれていた愛しの伴侶の元よ！」

「何、遂に見付かったのか!？」

「そうなの、早く逢いに行かないとお兄ちゃん素敵で格好良くて優しくてフェロモンむんむんで一目見ただけで胸がキュンとなって思い描いただけで切なくなつて触れられただけでイっちゃいそうになつて、ああ、ああ！」

「悶えるなよ！」

「これが悶えずにいられますか!待つててねお兄ちゃん、すぐイクから！」

お姉ちゃんの手を掴み直して開け放たれたままの扉を駆け抜ける。すべすべしてもちもちして思わず頬を擦り寄せたくなる感触だけど、なんとかお姉ちゃんの手から意識を切り離す。

回廊を左へ左へ、時々右へ。

階段を駆け降り再びダッシュ。

引き摺られるようになりながら横を走るお姉ちゃんが思い出したように言った。

「ねえミューリちゃん、今向かつてるのって転移門？」

「そうだよ!あれならお兄ちゃんの元へひとつ飛びだもん」

「でも私魔石持ってないわよお？」

「大丈夫、こんな事も有ろうかとコツソリ研究塔からちよろまかしてきたから!」

「あらあ、悪い子 でも恋する乙女は止められないって言うし、今回は特別に許しちゃうわ」

「さっすが、お姉ちゃんは話が解るっ！」

階段を駆け降り人通りの多い通路を擦り抜けるように駆け抜ける。みんな何事かとびっくりしてるけど、私とお姉ちゃんの顔を見て把握したらしく声援が飛んでくる。

「おっ、嬢ちゃん遂に恋人見付かったのか！」

「そうだよ！今から抱き締めてもらいに行くの！」

「よし、行ってこい！子供出来るまで帰って来るなよ！」

「ありがとう、おじさん！」

「そうかい、やっとミューリちゃんにも春が来たんだねえ」

「ミューリお姉ちゃん、結婚するの？おめでと〜」

「ナギさんも遂に嫁に行くのかあ。ミューリ嬢ちゃんとも仲良くな
！」

「くうっ、ミューリちゃんとナギさんが嫁に行っちゃうなんて」

「ははは、めでたい事さ、泣くんじゃないよ！それにしてもあの2人を一度に嫁に迎えるなんて、婿殿は幸せ者だねえ」

「あらあら、皆さんありがとうございます」

「みんな、ありがとう、ありがとう！」

暖かい声援に包まれて、ちょっとくすぐりたい。

みんなが祝福してくれた分より、もっと幸せになるからね！

一足早い結婚式みたいになった回廊も通り過ぎ、いよいよ目的の扉が見えてくる。

同じようにお姉ちゃんの手を離して空中に飛び上がる。

「ファルコンキイイック！」
「又ウウウイ！」

ワートホグに吹き飛ばされたマスターチーフみたいな声が出たけど
気にしない。
今度はそのまましゅたつと着地を決める。

「10、0！なんちつて」
「きゃあ〜、ミューリちゃんカッコ良い〜」

わあい、と笑顔で2度目のハイタッチ。
吹き飛ばされてピクピクしてる転移門の管理人に、すちゃっと右手
を上げてサムズアップ。

「そんな訳で、ちよっくら行ってくるわ！」

左手に握り締めた魔石を割ると、周囲に魔力の渦が出来る。
開放された魔力に反応して転移門が蒼く輝き、私とお姉ちゃんの体
を光が包み込む。

右手でお姉ちゃんの手を繋ぎ、私は高らかに詠唱を始めた。

「開け、空間の門よ！私とお姉ちゃんを望むがまま、愛しのお兄ち

やんの元へ運べ！レッツ転移！」

眩い光が視界を埋め尽くし、空間が弾けるように歪んで、私とお姉ちゃんは空間を飛んだ。

「しっかし、ミューリにあそこまで慕われるとは如何程の人物だったのか。それとなく同情もするが」

ふう、と溜め息を吐き出して走り去った廊下を見詰める。

と、先程まで動かなかった長老が微かに身動きした。

矢張り長老ともなれば何が起こるのか予見出来ていたのだろう、動じず黙って送り出してやるとは流石長老。

俺もいつかは長老のようにどっしりと構えた大人になりたいものだ。

「ふわぁ〜あ、ちょっとうたた寝してしもつたわい」

「って、寝てたんかい！」

「ほ、どうしたんじやロージ？何かあったんかいのう」

背伸びして骨を鳴らす長老。

アンタが寝てる間に嵐が来たのさ、とは言えずに深い溜め息を吐くしか無かった。

閑話 忘れられた集落から。(後書き)

今回はちよっぴり短いです。

それと前回のお話にはなんちゃって科学が満載です。

学校とかで話したら黄色い救急車を呼ばれるので注意が必要です。

二―ト脱出の第一歩。

びよびよびよ。

かわいらしい声に導かれるように、枕元へ手を伸ばす。手探りでスイッチを探し当てばちっと押すと、耳をくすぐっていたかわいらしい声が途切れる。

朝かあ。

ぼんやりとする意識で無理矢理上体を起こすと、カーテンの隙間から柔らかな陽射しが目を刺激する。

ぼーっとしていたら左腕を何かが引つ張ってくる。

何だろう、と目を向けたらパジャマ姿のミナが微笑んでいた。

あれ、何でミナがここにいるんだろう。

取り敢えず笑顔を返すと、急にミナが抱き付いてきた。

「わぶっ、ミナ、何……」

「ちゅっ、ちゅ、ちゅぶっ、んっ、んむっ、ぺろぺろ、はむっ、ちゅうっ」

キスされました。しかも濃厚なやつ。

突然の事に驚くけど、僕にいつまでも驚いている余裕は無い。

何故なら僕の息子が最高にハイっちゃってるからだ。

朝だからただでさえ血流が良くなってる所に、美少女の甘い匂いと柔らかな舌触りがプラスされて気力限界突破状態だ。

思いつ切り自己主張を始める息子に気付いて、ミナがほっぺを赤く染めた。

もじもじと指を突き合わせながら、上目遣いに僕を見上げてか細い声を出す。

「あのね、私まだお子様だから気持ちよく出来ないかもしれないけど、ユーリがしたいなら……私、頑張るよ？」

わーにんぐ、わーにんぐ！

りせいがほうかいしています、すみやかにしゅうぶくしてください！あれ、発音わーにんぐでいいんだっけ？

取り敢えずミナがかわいすぎて僕の理性がピーンチ！？

思わず抱き締めようとする両腕と突き上げようとする腰を気合いでねじ伏せる。

ダメだ息子、一時の快楽に負けてミナを傷付けたら後悔するぞ？

頭の中の天使と悪魔が協力して息子を取り押さえるのを確認して、僕はゆっくりとミナの体を引き離れた。

「ミナ、気持ちは嬉しいけど、まだダメだよ」

「……やっぱり、私みたいな子供じゃダメ？」

「違うんだ、ミナ。ミナはかわいいし優しいし、とつても素敵な女の子だよ。だけど、だからこそ、自分を安売りなんてしちゃいけない。ミナが子供を作る年になって、自分が思い描いた大人になる時まで待つんだ。その時に、まだ僕を好きでいてくれたなら、僕の方からプロポーズさせて欲しい」

中学2年の時に考えた対幼女説得呪文がこんな所で役に立つなんて、
案外中2病も悪くないかも。
まあほとんど本心だけどね。

大人になっても僕なんかの事を想ってくれる人なんてそういないだ
ろうし、そこまで僕を想ってくれるなら、僕もその想いに全力で応
えていきたいし。

……はっ！なんか今すごい恥ずかしいセリフを言った気がする！
こういう時は……これだ！

キリッ。

ふう、これで何を言っても恥ずかしくないぞ。

そんなしょうもない事を考えてる僕とは対照的に、ミナはうっとり
とした目で僕を見上げていた。

うっ、キラキラの目が眩しいです。

「ユーリ……うん、私大人になるまでガマンするね。あ、でもユー
リがガマン出来なくなったら、いつでも言ってるね？私の体と心はユ
ーリ専用なんだから」

ぐはあっ！

僕の理性に大ダメージ！

息子軍の盛り返しに天使軍と悪魔軍は押され気味です。

いやいやミナ、せっかく僕がミナに我慢するよう言ったのに、逆に
僕が我慢出来なくなるような事を言ったらダメだよ。

悶えてる僕に、もう一度優しく触れるだけのキスをして離れるミナ。

さつきまでお腹の上にあつた体温が失われていくのを、ちよつぴり寂しく思いながら、僕は枕元の目覚まし時計に目を向ける。

おはよう、美由里。

愛しい妹の声が吹き込まれた、少し色褪せた目覚まし時計。昨日麻袋を漁っていたら、地球の僕の部屋に置いてあつたハズのこれが出てきた。

暖かくて寂しい、なんとも不思議な気持ち覚えて、僕はこれを枕元にセツトしたんだ。

一週間振りに聴いた妹の声に心が和む。

ミナやエアリーさんも素敵だけど、やっぱり妹分を補給しないと元気が出ないしね。

ふと視線を感じて顔を戻すと、ミナが優しく微笑んでいた。

「ユーリ、妹さんの事大好きなんだね」

「うん、自慢の妹だよ」

「そっかあ、ちよつとしつとしちやう」

「嫉妬？」

「だつて私の知らないユーリをいっぱい知ってるし、ユーリにそんなに愛されてるなんてうらやましいもん」

「あはは、でも妹からしたらミナの方が羨ましいかもね」

「ほえ、なんで？」

「よく僕のお嫁さんになりたいと言つてたけど、兄妹だから結婚出来ないって言つたら泣かれちゃったし。だからその辺りはミナの事を羨ましがってるかも」

「どうかなく？ユーリは私みたいな小さい子供にもよくじょうしち

やう、えつちさんだからね 妹さんに迫られたら断れなかつたかも」

「ハツハツハ、そんな事……ナイデスヨ？多分」

「あはは、ユーリのへんたい」

「なにおう！？」

「わあ、ユーリが怒った」

ドタバタと追いかけてつこを始める。

部屋を3周した所でわざとミナが掴まり、僕に擦り寄ってきた。

そのままベッドに座り、膝の上にミナを乗せて後ろから抱き締める。

「わあ、つかまつちやった！？ユーリにえつちな事されるう」

「ふっふっふ、そんなにえつちな事されたいなら、ミナにはすぐく

えつちなお仕置きしちゃうぞ」

「ユーリさん、朝から何を騒いで……」

「「あつ」

ある意味絶妙のタイミングでシーナが部屋のドアを開けた。

ベッドの上には走り回ったせいで顔を赤くした、少し息の乱れた2人。

ミナは僕の手を自分のまだ膨らんでもいない胸に押し当てて、僕はさっきの余韻でテントを張ったままの下半身をミナの太腿に挟まれている状態。

ぴこーん、とどこかでフラグの立つ音が聞こえた。

「ユーリさああああん！」

こうして僕とミナは朝から雷の洗礼を受けるのでした。
ちゃんちゃん。

「はっはっは、それでユーリ君のほっぺに見事な紅葉が付いている
訳か」

「まあ自業自得な面もありますよ。っていつかこっちの世界にも紅葉あるんですね、それにびっくりですよ」

テーブルを4人で囲みながら、簡単な朝食を取る。

ちなみに今日の朝ご飯担当は僕だ。

お馴染みの麻袋から取り出した食パンに甘い玉子焼きとハムとチーズを載せて、窯に入れてパンに軽く焦げ目が付いた所で取り出す簡単レシピだ。

飲み物は同じく麻袋から取り出した100%オレンジジュース。

何故か取り出した時に冷蔵庫の中に入れてたのだったくらいキンキンに冷えていた。

色と香り、それに味を見た限り賞味期間にも問題はなさそう。

やっぱりエアリイさんが気に入って、早々に1リットル飲み干してしまった。

こくこく喉を鳴らして美味しそうにオレンジジュースを飲むエアリイさんは小動物みたいでかわいかった。

シーナはムスツとした顔で蕎麦茶をすすっている。

パンに蕎麦茶はどうだろう、って思ったけど本人が満足そうだしいいか。

ミナは頭に真新しいたんこぶを作って、もみゅもみゅと小さな口で

パンを咀嚼中。

甘い玉子焼きが大ヒットらしく、食べてるパンは早くも5切れ目。そのちっこい体のどこに入るのか、お兄さんすごく疑問です。

かくいう僕はエアリースさんに指摘された通り、ほっぺに真っ赤な紅葉をくつつけている。

じんじんひりひりと痛むけど、シーナが付けてくれた傷って考えたらむしろ……はっ、いけないいけない、思考が変態チックになつた。

気を付けないとまたシーナにビンタされちゃうし。

あれ、それって罰だっけご褒美だっけ？

「あ、そろそろ時間か。食べたら出発しないとね」

まったりしてたら腕時計からピーピーと電子音が鳴り響く。

示された時間は8時。

もうちよつとしたら街へ行く行商人の馬車が出発する時間だ。

「次に逢うのは一週間後か。ああ、矢張り私も一緒に行こうかな？」

「あはは、心配性ですねエアリースさんは。大丈夫、しっかり稼いできますから！」

「いや、そういう訳では無いんだが……」

皿に手を伸ばすと指先が空を切る。

ありゃ、もうみんなで食べちゃったか。

まあ腹八分目でいいかな？

って思ってたなら、ミナが持つてるパンを半分にちぎって片方を僕に

差し出した。

「はんぶんこしよ」

「ありがとうミナ」

「にへへ、ふーふはなんでもはんぶんこだよ」

パンを受け取り、2人で仲良くもぐもぐはむはむ。

何故かこのパンが一番美味しく感じる。

やっぱり最上の調味料は愛ですな。

美味しく頂いてごちそうさま。

さあ、早速出発の為の準備をしないと。といっても、着替えて麻袋を持つくらいだけどね。

いつもの白Yシャツと黒のスラックス、その上に灰色のローブを羽織る。

耐熱性や耐寒性、耐刃性にも優れて寝るときには毛布代わりにもなる万能ローブだ。おまけに軽くて魔法耐性まで付いている。

勿論麻袋から出て来た。

正直この麻袋を持ったら誰でもチートになれる気がする。

麻袋を肩に掛けて準備完了。

あ、肩紐は昨日シーナが付けてくれた。

裁縫してる姿はなかなか似合ってる、ちょっぴり見惚れてたら「何見てるんですか」って照れたシーナにぺちぺち叩かれた。

ツンデレさんめ。

玄関に出るとエアリースさんとシーナが見送りに来てくれていた。

「あれ、ミナは？」

「呼んだんですけど降りて来ないんです、返事もしないし」

「恐らくユーリ君と離れるのが寂しくて会いに来れないだけじゃないかな？」

「そっか、了解。お土産買ってくるから期待してて、ってミナに伝えておいて」

「ああ、解ったよ。私とシーナ君にもお土産を忘れないでくれよ？」

「あはは、勿論だよ。じゃあシーナ、エアリーさん、行って来ます」「行ってらっしゃい、ユーリ君」

「道中気を付けて下さいね」

手をぶんぶん振りながら教会を後にする。

見送りに来てくれなかったミナがちょっと心配だけどね。

朝ご飯の時は普通だったのに、なんでだろう？お土産をちよっぴり豪華にして機嫌直してもらおつと。

そんな事を考えながら村を歩いていくと、村の入り口に止まる馬車を見つけた。

そろそろ出発の準備が完了するみたいで、乗り込むのは僕が最後までしい。

商隊の一番偉いっぽい人が僕を見て、恰幅のいい体を揺らしながら近付いてきた。

「おつ、きたな兄ちゃん」

「おはようございます。お待ちせしたみたいですね」

「いやいや、気にしないでいいさ。なんせ兄ちゃんの初仕事への門出だ、日が暮れるまで待ってやるさ」

かっかっか、と豪快に笑うおじさんに若干気圧されつつ、指定された3台目の馬車に乗り込む。

中には全身を紫のローブで隠すようにした人が座っていた。結構小柄な人で、頭をすっぽりフードで覆っている為顔は見えない。

「初めまして、ユーリといいます。街までの短い間ですけどよろしく願います」

出来る限りにこやかに話し掛けてみた。

やっぱり旅の仲間とは仲良く話が出来くらいじゃないとつまらないしね。

フードの人は僕の方に顔を向けると、軽く会釈をしてくれた。

恥ずかしがり屋さんなのかな？それとも単に無口だったり。

フードの人の向かいに座ると、前の方からかけ声が聞こえてきた。出発の合図だ。

ゆっくりと馬車が動き出し、タマタ村が離れていく。

少しだけ後ろ髪を引かれる光景を眺めながら、僕は拳を握って決意を新たにした。

よし、こっちの世界での初仕事だ。もう誰にもニートだなんて言わせないぞ！

事の始まりは一昨日。

夕食の席で教会の運営費やシーナ達の生活費の事を聞いたのがきっかけだった。

「じゃあ教会回りは全部？」

「ええ、生前に管理費や維持費やそれに掛かる税金は神父様が一括で払い込んでいるので、実質掛かっているお金は私達の食費や日用品を買う雑費くらいですね」

「心配しなくてもだいじょぶだよ！私がユーリを養ってあげる」

「い、いやいや、それは男の沽券に関わるから謹んで辞退させてもらうよ」

こんなに小さなミナのヒモになるとか、いくら何でも情けなさすぎる。

自分の食い扶持くらい自分で稼がないと！

そんな訳でどこか働ける場所は無いかと聞いてみたら、エアリィさんが街の冒険者ギルドに登録したらどうかって言ってくれた。

「冒険者ギルドは仕事を斡旋するギルドだね。簡単なものは庭の草むしり、難しいのや危険なものになると山賊や傭兵崩れの掃討なんかがあるよ」

「なるほど、それなら僕にも出来そうですね」

「ここから近い街といえば北の『クワンカ』かな。確か今来ていた商隊が北へ向かうようだから、同乗を頼んでみたらどうだい？」

「そうですね、せっかくだし行ってみようかな」

冒険者ギルドかぁ、なんだか異世界っぽいなあ。
ちよっぴりテンション上がったきた。

「よおし、いつぱい稼いでミナもシーナも養ってあげる！」

「おお、ユーリカツコいい」

「わ、私もですかっ!？」

「おやおや、私は養ってくれないのかい?寂しいなあ」

「勿論エアリーさんですよ!みんな纏めて僕が面倒見ます」

思い返したら妙なフラグいつぱい立てた気がする。

っていうかあの発言って一歩間違えたら「みんな僕の嫁!」って言うてるようなものじゃないんだろうか。

……ま、まあ余り深く考えるのはよそう。

そんな訳で僕は冒険者ギルドへ向けて出発したんだ。

往復で3日くらい掛かるから実質4日しか働く時間は無いけど、その分数をこなして稼ごうかな。

なんて考えていたら視線を感じた。

先程からフードの人がチラッと僕の様子を窺ってる。

照れて話し掛けづらいのかな?

なんて思ってたたら、突然フードの人が僕に声をかけてきた。

「もう、まだ解んない?」

「へっ?」

僕の膝の上に乗って、被っていたフードを脱ぎさる。
はらりと流れる紫銀のショートボブ。
くりくりつとしたかわいい瞳が、イタズラっ子のように僕を見上げていた。

「み、ミナ？」

「うん、ユーリのミナだよ」

満面の笑みを浮かべて僕に抱き付くミナ。
幼女特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

ああ、やっぱりミナはいい匂いがするなあくんかくんか。
つてなんでミナがここにいるんだ！？

正気に戻った僕が口を開こうとしたのを察知してか、ミナは柔らかな唇で僕の言葉を封じた。

「ちゅっ、ちゅくっ、れろれろ……」

ミナの舌が僕の歯や舌を舐め上げる度に、ぞわりと快感が込み上がってくる。

小さな舌の横から甘い唾液が流れ込み、僕の思考を溶かしていく。

ミナの唾液を求めて舌を伸ばす。

一瞬だけ怯んだミナの舌に僕の舌を絡ませ、僕の匂いを、味を染み込ませていく。

ぴくぴくとかわいらしく震える体を優しく抱き締め、その小さな舌先を吸い上げた。

「ふむうっ、んっ、んんっ」

与えられる快感に身を任せて目を潤ませるミナ。

ハートマークを乱舞させながら、僕の唾液をこくこくと喉を鳴らし
て美味しそうに飲み込む。

突然、馬車が大きく揺れた。

道端の石にでも乗り上げたんだらう。

その衝撃でミナの体が浮き、落ちた時に僕のストラップスに張られた
テントにミナの股間が擦れた。

声にならない声を上げ体を痙攣させる。

不意の衝撃に絶頂させられたようだ。

全身から力が抜け僕に凭れ掛かるミナ。

唇が離れ、荒い息を吐き出す。

「はへえ……あへえ……ゆーり、はげしすぎだよお……」

まだ性の目覚めも来ていないミナには刺激が強すぎたみたいで、
らしいないところけ顔を僕に向ける。

僕は優しくほっぺにキスをして、脅かすように言った。

「ミナがお嫁さんになったら、もっと気持ち良くてもっとえっちな
事してあげる」

「ふああ……っ、なるう……ゆーりのおよめさんになるからあ、も
っとお、もっとしてえ……」

「ふふ、ミナはえっちだなあ」

もう一度優しくほっぺにキスをしたら、ミナはぶるつと体を震わせて気絶した。

余りの興奮と快感に脳が付いてこれなかったみたいだ。

やっぱりかわいいなあミナは。

髪を撫でてあげると幸せそうに微笑んだ。

って、つい本能に任せてキスしちゃったけど。なんでミナがいるか聴きそびれちゃったな。

次からはちゃんと流されないようにしつかりしないと。

でもミナかわいいから無理かな、なんて早くも敗北宣言しつつ、起こさないよう優しく抱きかかえる。

っていうか朝ミナに言った事と真逆な事してるな僕。

あれだけキザなセリフを口にしたのに早くもミナの幼女ボディを弄ぶなんて、僕ってもしかして鬼畜？

ちよっぴり自己嫌悪に陥っていると大きな欠伸が出る。

そういえば朝早かったし、昨日は興奮して眠るの遅かったなあ。

街に到着するのは明日の昼前。

やる事といえば精々毎食のお手伝いだ。

それまでミナとゆっくりしていようかな。

ぽかぽかと暖かい空気に包まれながら、僕も少し眠る事にした。

いざ行かん、冒険者ギルド。

どうも、最近息子に精神を奪われがちな片桐悠里です。

昨日は本当に色んな意味で危なかった。

僕にべったりなミナを見て商人さんには冷やかされるし、煽られたミナが迫ってきて。ピンクで気まずい雰囲気になるし、馬車の中で何回かミナを押し倒しそうになるし。

いやあ、流石に我慢したよ。

どうせなら気兼ねなく2人っきりの空間でミナの初めてをもらってあげたい……って、また思考が息子に奪われてる！？

こほん、まあそんな事はあったけど特に事件も無く1日目は終了した。

いや、ミナがいた事が事件っちゃ事件だけどね。

聴いてみたら、僕と離れたくない一心でついて来ちゃった、って事らしい。

止めても聞かないだろうって判断したエアリイさんにこっそり手回ししてもらって、ローブとか護身用のナイフとか用意してもらったみたい。

でもシーナには内緒だったみたいで、帰ったらげんこつが確定。

家族に心配掛けちゃダメだよって、叱ったらミナは案外あっさりと聞き入れてくれた。

やっぱり妹を叱る時にも使った「めっ」が効いたのかな？

取り敢えずお仕置きという事で、ミナには僕が担当する夕飯作りの手伝いを任命した。

夕食の時に僕が作った豚汁はなかなか好評だった。

商人さん達はこれを商品展開出来ないかって考えてたし、護衛の傭兵さん達は競うようにおかわりしてくれた。

僕とミナは少し離れた所で互いに食べさせあつてた。

端から見たらただのバカップルだったんじゃないだろうか。

そして2日目の朝、珍しくミナよりも早く起きた僕はのんびりと外の景色を眺めていた。

僕の住んでた所じゃなかなか見られない、緑豊かな自然。

やっぱり空気が美味しいなあ、排気ガスも無いし車の騒音も無いし。ぼんやりしてたら前髪が鼻先に降りてきていた。

そういえば床屋で髪切ってもらったの2か月も前か、そりゃ伸びるよね。

「……………うっとおしいなあ」

ぼつりと口に出る。

おでこや鼻に髪の毛が掛かると、チカチカ痛痒くなるから嫌なんだよなあ。

帰ったらシーナにお願いしようかな？

あ、でもそれまでチカチカに耐えなきゃいけないのか。

うっとおしい部分だけ先に切って、後でシーナに整えてもらおうと。麻袋からはさみを取り出す。

出て来たのは何故か作用のはさみだったけど、まあ切れるからいいかって気にせず髪の毛を切る。

うん、まあこんなもんかな？

手鏡で変な髪型になってないのを確認してはさみをしまっ。

あ、どうせなら髪の毛も自動で処理した方がいいよね。

なんだかんだで慣れてきた僕は魔法の新しい使い方を試してみる事にした。

ずばり、魔法付呪！

大層なネーミングだけど、早い話が髪の毛にファイヤーの魔法をエ

ンチャントして燃やそうって事だ。

エンチャント出来るなら案外いい儲け話になりそうだし。

でも髪の毛って燃えると異臭するんだよねえ、どうしようか？

そこまで考えた時、昨日護衛のお姉さんが言っていた事を思い出した。

この辺には人を襲う狼が出るらしい。

その狼に髪の毛をくつつけて撃退したらどうだろう。

襲われる人もいなくなるし、狼には悪いけどこれも僕の好奇心の為、ちよっと熱いかもしれないけど我慢してもらおう。

早速髪の毛にファイヤーの魔法を宿す。

イメージは髪の毛を対象が接触したらスイッチが入って魔法が発動するピタゴラ風味。

ついでに狼を狙って追尾する魔法も付呪しておこう。

なんて名前がいいかな？

ストーカーだと犯罪チックだし、もっとナウイ名前を付けたい。

「……………チエイサー」

おお、これだ！

僕の好きなアニメの主題歌から取ってみたら意外としっくりきた。

早速付呪して馬車の覗き窓から髪の毛をばらまくと、風に乗って森の奥へ飛んでいった。

微かに犬の鳴き声みたいなのが聞こえてきたのはびっくりしたね。まさか囲まれてた？

怖い怖い、って身震いしているとミナが目を擦りながらもぞもぞ動き出した。

「ゆーりい……?」

「おはよう、ミナ」

「ゆーりだぁ ゆーりい、おはようちのゆう、しよぉ?」

寝ぼけ眼で僕に抱き付きキスをねだる小さなお姫様。

朝っぱらから余りのかわいさにお兄さん大爆笑しそうです。

というか、やっぱり昨日1日で僕とミナの距離が縮まった気がする。主にえっちな方向に。

外に出て顔を洗っていると、いい匂いがしてきた。

釣られて行ってみるとおじさんがコーンスープを温めていた。

ジャガイモやとうもろこし、カボチャなんかはこっちの世界でもポピュラーな食材で、特にとうもろこしは地球のよりずっと甘くて美味しい。

しかもとうもろこしは僕の好物。

口いっぱいによだれを溜めていたらおじさんに「待て、お座り」って言われた。

犬じゃないやい! って思ったけど体は反射的にお座りのポーズを取ってた。

妹とやっていたわんわんごっこの影響がこんな所にも!

おじさんはまさか僕が本当にお座りするとは思わなかったらしく爆笑してた。

むくれていたならコーンスープをちよっぴり多くよそってもらった。ラッキー。

まあミナに見られなかったのは不幸中の幸いだったかな?

見られたら恥ずかしいし。

朝食の後は再び馬車に揺られる時間。

狼が来るかな〜ってドキドキしてたけど、どつやらさっきので逃げ出したみたいで、ちょっと安心。

しばらくミナとイチヤイチャらぶらぶらしていると、前の方からおじさんの声が飛んできた。

「兄ちゃん、街が見えてきたぞ！」

おじさんの声に弾かれるように2人で身を乗り出して前方を見ると、活気溢れる街並みが広がっていた。

街の真ん中にそびえ立つ、一際高い真っ白な建物が見える。

あれが教会だろう。

この大陸では宗教がある程度の力を持っていて、一定の水準の教育は教会が行っている。

基本的に無料で教育や治療が受けられる為、貴族に受けは良くないけど民衆からの評判は上々。

だから民意を掴んでおく為に教会に何らかの形で支援せざるを得ないけど、元々教会に野心は無く政治や権力に色を見せないから取り入りにくく、まあ取り敢えず民衆の人気取りに仲良くしておくかってスタンスの貴族が多いらしい。

以上、エアリーさんからの受け売りっ。

僕だって偶には勉強するんだ。

まあ、今は初めて見る異世界の街にテンション上がっちゃってるけどね。

「おお〜、すごいや」

「おお〜、すごいね」

同じ反応をしてしまい、顔を合わせてクスクス笑っているとおじさんに怒られた。

「夫婦揃ってバカやってないで降りる準備しておけよ！」

「はあ〜い」

商隊の皆さんに別れを告げて中央広場まで歩いてきたけど、目に映るものが珍しくてぽかんとしちゃってた。

ミナも同じようできりにきよるきよると視線をさまよわせている。取り敢えず宿を探しに行く事にした。

ミナがいるからそれなりにいい宿じゃないといけないかな。

手を差し出すと、少し照れたように笑って僕の手をキュッと握るミナ。

ミナかわいいよミナ、ってのほほんとしつつ広場の案内板に目を通していると、活発そうな男の子が近付いてきた。

「兄ちゃん、何か探してるのか？」

「宿屋を探してるんだけど……この街は初めてだから、どこがいいか解らないんだ。そこまで高級じゃなくてもいいから、安心安全なご飯の美味しい宿屋ってあるかな？」

「それならうつつつけがあるぜ！」

「それじゃ案内してもらおうかな？」

男の子の手に銅貨5枚を握らせると、男の子は目を見開いた。

「ちよつ、兄ちゃんバカか!？」

「いきなり失敬な!？」

「いや、だつて普通銅貨1枚くれりゃいい方だぜ? 5枚なんて頭の緩いボンボンが気まぐれでバラまく時くらいしか見た事ねえや」

「いいの、これからいっぱい稼ぐ予定だし。それに後ろの子、妹さんじゃないの?」

僕の視線の先、男の子と同じ赤茶色の髪の毛をツインテールに纏めた女の子がこちらを伺っている。

手を振ったらちよつと驚いたみたいだけど、小さく手を振り返してくれた。

「偽善なのは解ってるけど、僕のいい気分を演出する為にもらつておいてよ。甘いお菓子でも買ってあげたら喜ぶんじゃない?」

「……変わった奴だな。でも、兄ちゃんバカだけどいい奴だ」

二カツと笑つて銅貨を受け取る男の子。

うん、いい笑顔だ。

ロリとシヨタには優しく親身に、それが異世界トリップでは大きな意味を持つハズ。

ちよつとした打算も含めて、逞しく生きて行かないとね!

先導する兄妹について行くと、脇腹の肉を摘まれた。

見るとミナがちよつとむくれた顔で僕を見上げていた。

「まったく、ユーリはすぐ小さい女の子の前でカッコつけたがるんだから」

「いたた、ミナ、痛いよ」

「ユーリのうわきものお」

クスクスと笑いながら僕の肉を摘むミナ。

くそう、早くも尻に敷かれ気味だ。

そうそう、路銀はシーナに借金してきたんだ。

お金稼いでくるって言ったのに、稼ぐ為のお金を借金するとか若干のヒモ臭がするけどね。

でも大丈夫、絶対にお金稼いで借金を返して、ついでにシーナにお土産までプレゼントしちゃうもんね！

そしたらシーナもちよっぴりデレたりしちゃうかも。

エアリイさんには髪飾りとか似合いそうだなあ、プレゼントしたら毎日付けてくれたりして。

でへへ、ってほんの少しニヤけたら脇腹の痛みが鋭くなった。

「いただだっ!?!」

「もう、ユーリのおバカ!……やっぱり胸大きくないとダメなのかなあ」

小さな呟きも聞こえたけど、僕は声を大にして言いたい。

ちっぱいも大好物です!

僕とミナのやり取りを見ていた男の子が頭に?を浮かべて言った。

「兄ちゃんとその子ってどんな関係なんだ？兄妹にしては似てないし」

「そうだなあ、多分「夫婦だよ！」……だそうですね？」

「疑問形で答えるなよ！つてか兄ちゃん尻に敷かれてるなあ」

「薄々気付いてたよ、それは」

「つと、着いたぜ兄ちゃん」

足を止めるとなかなか立派な門構えの宿屋があった。

大きな看板には……見た事も無い文字。

なんて読むのか見当も付かない。

「ちよつぱり値は張るけど安宿とは比べ物にならないくらい清潔だし料理も旨いぜ」

「道案内ありがとう。そうだ、冒険者ギルドってどこ？」

「それならこの道を真っ直ぐに行って広い通りを左に曲がったらすぐだぜ」

「そっか。ほい、お駄賃」

「……いや、もうどうでもいいか」

追加で銅貨5枚を渡した僕を呆れた顔で見上げた男の子。

なんだか諦めたように溜め息を吐いて、来た道に戻って行った。

去り際に両手をぶんぶん振ってバイバイしてくれた女の子に癒やされつつ、僕とミナは宿屋に足を踏み入れた。

内装は落ち着いた雰囲気、派手さはないけど華やかな印象。

と、来客に気付いた女性が床を掃いていた手を止めて、僕達に近付いてきた。

30過ぎくらいの背の高い女性で、女将さんって形容がぴったり合
いそうな人だ。

「いらつしゃい、部屋をお探しかい？それとも食事？」

「5日間程部屋をお借りしたいんですが」

「朝晩の食事付きで1泊銅貨30枚、5日間ならちよつと割引して
銀貨2枚と銅貨40枚でどうだい？」

「2人で寝られるちよつと大きめのベッドはありますか？」

「ああ、お洒落な部屋が空いてるよ」

「じゃあその部屋をお願いします」

僕は腰に固定したポーチから銀貨3枚を取り出して女将さんに渡し
た。

この世界のお金は4種類ある。

一番安い通貨が銅貨、銅貨50枚で銀貨1枚、銀貨50枚で金貨1
枚、金貨50枚で白金貨1枚だ。

今の会計なら銀貨3枚出してお釣りが銅貨10枚。

数学の授業中、広げたら手を繋いでる人形をプリントの切れ端で作
っていた僕にとって、この単位の理解はなかなか難しかった。

テストは常に赤点タイトロープだったし。

苦い思い出に浸っていたら、ミナに手を引かれて現実に引き戻され
た。

女将さんに案内された部屋は2階の右奥、なかなか広くてお洒落な
部屋だった。

ふかふかのソファーとシックなテーブル、そして目を引くダブルベ
ッド。

「朝食と夕食は1階の食堂に降りてきておくれ。教会の鐘が鳴る頃には用意が出来てるからね」

「解りました、これから5日間お世話になります」

ミナと一緒にぺこりと頭を下げる。

すると女将さんは驚いたようで、頬をポリポリ掻いていた。

「今時珍しく礼儀正しいお客様だねえ、なんだかこつちが落ち着かないよ。はい、これが部屋の鍵」

「どうも。じゃあミナ、荷物置いたら早速行こうか？」

「うん、行こう行こう」

といっても荷物らしい荷物は着替えを入れたサックくらいしかない。ほとんど変わらない格好のまま、僕とミナは宿屋を後にした。

男の子に教えられた道を、手を繋いで歩いていく。

「なんだかデートみたいだね」

「でえとつて？」

「恋人が2人で仲良く出掛ける事だよ」

「お、デートデート」

ご機嫌になるミナに目を細めつつ、僕はまた1つ解らない事が増えたなあ、と思った。

こうして会話が出来てるのは、多分なんらかの魔法かそれに近い力が働いているせいだろう。

文字が違うんだから使っている言語形態そのものが違うんだと思う。不思議なのは会話していて、僕が日本語として話している言葉は通じるのに、僕が外国語やカタカナ語と認識して話している言葉が通じない事だ。

正確には通じる言葉と通じない言葉があるって事かな。

なんとなくこうじゃないかなって、理由として考えられるのは、日本語で説明出来るか否かで分けられる所。

例えば、スプーンやフォーク。

あれは『スプーン』 や『フォーク』 ってしか認識出来ないから、そのまま伝わってるんだと思う。

デートみたいに、逢い引きって言い換える事が出来る言葉は相手に伝わってない気がする。

でも『ボウル』 は器って言い換えられるけどエアリイさんに通じだし、僕の考えた法則が合ってる証拠も無いからなあ。

まあいいか、伝わらなかつたらその都度説明すれば。そうこうしている内に冒険者ギルドに着いた。

入り口前方には受付、左には道具屋と歓談の出来る広場、右には依頼掲示板と食事の出来る軽喫茶がある。

独特の雰囲気にもまれてみると、喫茶店の方から僕を呼ぶ声が聞こえた。

「おい、ユーリ君。こっちこっち」

「あれ、護衛のお姉さん？」

「さっき振り」

ヒラヒラと手を振っているのは、さっきまで商隊で一緒だった護衛のお姉さん。

褐色の肌に輝く銀髪ショートボブ、Dカップの胸を黒いジャケット

トで覆っているのにへソ出しルック、同じく黒のホットパンツに黒のサイハイソックスが眩しい絶対領域を演出、ぷりんとしたお尻やむっちりした太腿が妖艶な色香を醸し出しているのにやや幼い顔付きがアンバランスで魅力的なお姉さんだ。
なんとなく猫っぽい緑色の目が人懐っこい印象を与える。

「これからギルド登録？」

「ええ、そのつもりです」

「そっかそっか、登録終わったら一緒に何かお仕事するかい？」

「簡単な仕事で雰囲気掴むつもりだったので退屈かもしれませんよ」

「大丈夫大丈夫、あたし暇だから全然気にしないよ」

「あはは、了解です」

くるつと踵を返して喫茶店へ戻っていくお姉さん。

いいお尻だ。

ちよつと見惚れていると、横でミナがほっぺを膨らませていた。

「ぶー」

「ミナ？」

「ぶくー」

「つんつん」

「ぶちう」

「あ、空気抜けた」

「もう、遊ばないでよっ」

「あはは、ゴメンゴメン」

膨れたミナのほっぺをつついて空気を抜いてやる。

しっかり付き合ってくれる辺り、ミナは良い子だよね。

つと、いけないいけない、早い所登録しよつと。

受付は……わお、受付のお姉さん僕が入ってきた時のスマイル保ってるよ。

すごい精神力だなあ、と妙な所に感心しながら僕は受付のお姉さんに話し掛けた。

「いらつしゃいませ、冒険者ギルドへようこそ」

「あの、冒険者として登録したいんですけど」

「はい、新規登録ですね。ではこちらの書類に必要な事項をお書き下さい」

「あ、僕読み書きが出来ないので代筆をお願いしてもいいですか？」

「はい、構いませんよ。ではお名前からお願いします」

「名前はユーリです」

名字の方は黙っておいた。

シーナが名字持ちは貴族だつて言つてたから余計なトラブルに巻き込まれるかもしれないしね。

その後も色々な事を聞かれた。

年齢、住居若しくは拠点、犯罪歴等々。

犯罪歴は有つても言う人いないんじゃないかなあ、つて思ったけどちゃんと嘘を見抜くマジックアイテムがあるらしい。

確かに犯罪者を抱え込みたくはないしね。

「職業はどうされますか？」

「職業？」

「はい、これは他の冒険者とパーティーを組む際の参考になります。前衛担当であれば戦士や剣士、後衛担当であれば狩人や魔術師といった具合です」

あ、今受付のお姉さんパーティーって言ったね。
やっぱり通じる言葉には何か法則があるのかな？
取り敢えず自分の職業を考えてみる。

まあ、あんまり目立ってもヤダしシヨボいのにしておこう。

「じゃあ魔法使いをお願いします」

「魔法使い……で宜しいのですか？」

「あれ、なんかまずかったですか？」

「いえ……普通ですと魔術師や魔導師と仰る方が多いので」

「まだそう名乗れる程の実績も無いので、魔法使いにしておけば仮にパーティー組んでも余計な負担掛けないかなあと思いました」

「お若いのに立派ですね。解りました、魔法使いで登録致します。

これで貴方もギルドの一員です、こちらのギルドカードが貴方の身分証代わりになりますのでくれぐれも紛失なさないようにお願い致します。紛失致しますと如何なる理由であれ再発行に銀貨1枚が必要になります」

その他の注意事項や基本的な流れを右から左へ受け流す。

……うん、こつという話には僕の集中力はまるで発揮されないんだ。
いざとなったらミナに聴こう。

ギルドカードを懐のポケットにしまい、依頼掲示板の方へ向かう。
すると1台のテーブルに目が釘付けになった。

回転寿司でも見た事無い量の皿が積み上がっていて、その中心では銀色の髪の毛が揺れ動いている。

予想は付くけど、なんだあれは。

若干呆れつつ眺めていると、最後の料理を食べ終わったらしくお腹をぼんぼんと撫でながら暴食天使が姿を見せた。いったいあの体のどこに入ったんだろう。

「おっ、ユーリ君登録終わった?」

「終わりましたよ。っていうか、すごい量ですねコレ」

「まだまだおやつ程度だよん」

「これでおやつ程度!?!」

ええい、お姉さんの胃袋は宇宙か!

昨日も僕の作った豚汁7回もおかわりしてたし。

取り敢えず依頼掲示板を眺めてみる。

薬草の採取、鉱石の採取、角ウサギの駆除、灰色狼の撃退、ゴブリンの掃討……って、この世界にゴブリンいるの!?!

てっきり魔物の類はいないと思ってたけど、そんな事は無かった。と、左腕の袖をミナに引っ張られた。

「ねえ、ユーリ。これなんかどう?」

ミナが差し出した依頼は屋根の修理。
報酬は銅貨3枚。

確かにこれなら僕にも出来るし、最初の依頼としてはぴったりかも。

「うん、いいかもね。さつすがあ、ミナは話が解るっ」

「にへへ、もつと褒めていいよ?」

頭をくしくしと撫でると嬉しそうに目を細めるミナ。

その横でお姉さんはうんうんと感心した様子で頷いていた。

「色々な依頼がある中でその依頼にするなんて、ユーリ君は人間が出来てるねえ」

「え、なんでですか?」

「こういった雑務系の依頼は初心者用に街の人がわざわざギルドに依頼してくれてるのさ。簡単な仕事だけど、働いてお金をもらって喜びを知ってもらう為だね。だけど最近の若い子達はすぐゴブリン退治なんだ、って飛び出したがるからねえ。あたしだって初心忘れるべからず!って時々受けてるのに、全く困った話だよっ」

お姉さんの言葉に思わず顔を背ける人がチラホラ。

まあ、気持ちは解るけどね。

男の子ならいつだって冒険に出掛けたくなるものだ、ってCMでもやってたし。

「おっと、ちょっと愚痴っぽくなっちゃったね。しっばいしっばい」

自分でおでこをコツンと叩くお姉さん。

妙に子供っぽい仕草がまたかわいい。

ちよっぴりエアリィさんに似てるかもしれない。

受付に依頼の紙を持って行って、依頼受注完了。

早速初仕事へレッツゴー！

ギルドで一悶着ありました。

クワンカの街は5つの区画に分かれている。

南側に宿屋や交易店、ギルドなんかがある旅店地区。

閑静な住宅街と憩いの広場がある北の居住地区。

衛兵詰め所や図書館、歴史的建造物でもある英雄の銅像が立つ東の公社地区。

西には活気溢れる飲食店や酒場、本屋に装具屋、鍛冶屋を有する商人地区。

そして教会と大きな広場がある中央地区だ。

今僕は北にある居住地区の一軒のお宅にお邪魔してる。

善は急げという事で早速ギルドの依頼をこなしに来たのだ！

とちよつとテンション上げてお送りしているのには訳がある。

屋根の修理という事は屋根に登る必要がある訳で。

こわっ、この中途半端な高さこわっ！

特別高所恐怖症って訳じゃないけど、この5m付近の高さって一番怖い。

多分高度5000mとかなら平気だけど、これくらいの高さだと自分が落ちたらどうなるかを鮮明に想像出来るから怖いんだと思うけど。

ちなみに屋根の修理っていつでも専門的な事はやらずに、上から木の板を張り付けて雨漏りしないようにするだけ。

元々大工さんに修理を頼んであって、大工さんが来る日までの間の臨時依頼だったみたい。

やる意味無い所か最悪屋根の状態が酷くなるんじゃないかなって

思っけど、そこも含めて初心者向けの依頼って事らしい。

本当に善意で依頼出してくれてるんだなあっていうのが解る。

取り敢えず傷んでる所を外して新しい木の板をはめる。

釘を使わなくていいように、パズルの積み木みたいな形に切り出した板を上からはめ込むように当てて、木槌を無理な力を込めずに振り下ろす。

こんこんこん、と小さく何度も振り下ろすのがコツだ。

こうして上手い事はまったら周りに溶かした蠟を流して完了。

冷えた蠟が隙間を埋めて水漏れを防いでくれる。

それに大工さんが修理する時も外しやすくして対処に困らないハズだ。

ま、応急処置としては上出来かな？

梯子をおっかなびっくり降りると、お姉さんが出迎えてくれた。

「お疲れ様。はい、ユーリ君もお茶をどうぞ」

「ありがとうございます、お姉さん」

「ん、ユーリ君はあたしの事名前で呼んでくれないねえ。お姉さん寂しいっ」

「いやいや、まだ名前聴かせてもらってないですから」

「ありゃ、そうだったっけ？」

お茶をすすりながら首を傾げるお姉さんを見る。

お姉さんオトボケキャラだなあ。

まあ、そんな所もかわいいんだけどね。

「あたしはティスカ・ウアー・口。本命はティス姉、対抗でティスちん、大穴はていていお姉ちゃんはどう？」

「どう？と言われましても」

「やん、ユーリ君敬語禁止っ」

「えつと……これでいい？ティス力さん」

「そんな他人行儀じゃなく、もつと愛情と情欲を込めてお姉ちゃん
って呼んで」

「情欲って……じゃ、じゃあ、ティス姉」

「はうん、もつと呼んで！」

くねくねと体を悩ましげによじって悶えるティス姉。

なんだろう、色んな意味で危険な人だ。

テンション高いなあ。

ちよっぴり引いてたらミナが様子を見に出て来た。

ミナには僕の作業中に依頼人のお婆さんの話し相手になってもらっ
ていたんだ。

「ユーリ、もう出来たの？」

「うん、あれでしばらくは大丈夫だと思うよ」

「さすがユーリ、えらいえらい」

ミナの小さな手で頭をくしゃくしゃ撫でられる。

いつつも撫でる側だからかすごく新鮮だ。

なんだか癖になりそう。

「おやおや、もう終わったのかい。ご苦労様」

「あ、お婆さん。応急処置って事だったので周りの板はそのままに
してありますから、大工さんの仕事に影響は出ないと思いますよ」

「若いのにしっかりしてるねえ。ほれ、ギルドカードを出しなさい」

ギルドカードを差し出すと、お婆さんの手が白く光り出した。すぐに光は収まり、ギルドカードを受け取ると情報が頭の中に浮かび上がる。

『依頼内容、屋根の修理。進行状況、完遂』

これを受付に持って行ったら晴れて依頼完了って訳だ。つまり初仕事は無事成功。達成感でいっぱいになった僕は足取りも軽やかに冒険者ギルドへと戻った。

「はい、依頼完了を確認しました。お疲れ様でした、こちらが報酬の銅貨3枚です」

受付のお姉さんから銅貨を受け取ると、感動が胸に込み上げてきた。初報酬を手に入れた！

頭の中でファンファーレが鳴り響く。

後ろでミナとティス姉が拍手してくれた。

あ、そうだ。ついでに魔法付呪って仕事になるか聴いてみよう。

「あの、お姉さん。ちょっと聴きたいんですけど」

「はい、なんででしょう?」

「魔法付呪って仕事になりますか?」

それまでザワザワと賑わっていたギルド内が一瞬で静まり返る。

え、僕今ザ・ワールド使った?

受付のお姉さんは「少々お待ち下さい」って言って、固まった笑みを浮かべたまま2階へとダッシュして行った。

もしやと思うけど僕盛大にフラグ立てた?

なんか小さな声で「あんな子供がか?」とか「今の内に連れ出す?」とか不穏な相談をしているのが聞こえる。

そんな空気をを感じ取ってか、ミナが少し怯えるように抱き付いてきた。

目を合わせて、心配無いよって微笑む。

これはまずったかなあ。なんかハイエナの群れに投げ込まれた羊の気分。

聴き方が明らかに付呪出来る人の聴き方だったしなあ。

来る途中でさり気なくティス姉に付呪の価値や常識を聞き出せば良かった。

と、2階から受付のお姉さんが急ぎ足で降りてきた。

「お待たせしました、こちらについて来て下さい」

言葉少な目に先導するお姉さんの後ろを慌てて追いかける。

ミナは僕の手をぎゅって握って離さないしティス姉はなにやら思案顔。

案内された部屋にはソファアールと執務机が置いてあって、難しい顔をした恰幅の良い男の人が待っていた。

多分、この人が責任者かな？

「どうぞ、掛けて下さい」

「あ、はい、失礼します」

促されてソファアールに腰を下ろす。

僕の左にミナが抱き付くように座り、右側にティス姉が足を組んで座る。

「まずは自己紹介させてもらいましょう、私はこの街の冒険者ギルドの責任者、トレスキンと申します」

「僕はユーリと言います。こっちはミナ、僕の……まあ、婚約者だと思っして下さい」

「あたしはただの付き添いだから気にしないでいーよ」
「相変わらずだな、ティスカ」

色々説明が面倒だしミナを僕の婚約者という事にした。

それでいいかな？って目を向けると、ミナは僕に任せてくれるみたいで小さく頷いてくれた。

ティス姉はどうやらトレスキンさんと知り合いみたいだね。

こほん、と咳をしてトレスキンさんが僕に向き直る。

「それではユーリさん、聞いた話では貴方が魔法付呪が仕事になるか、と尋ねたそうですが？」

「はい、尋ねました」

「それは何故ですか？」

「何故、とはどういう意味でしょう？」

「魔法付呪が出来る人は何もせずとも、その特異性故に大金を手にする事が出来る。何故なら魔法付呪された装具は非常に貴重な物だからです。故に魔法付呪された装具を求める者は多い。1つの装具の為に争いが起こる程です。それをわざわざギルド内で不特定多数の者に聞かせた、その真意を問いたい」

わーお、実はトレスキンさんプチ切れしてない！？

プレッシャーが半端ない。

僕の予想以上に魔法付呪はレアスキルだったみたいだ。ともあれ、誤解を招いたようだし素直に謝っておこう。

「申し訳ありません、魔法付呪にそれ程の価値があったとは夢にも思わなかったのです」

「ほほう、あの言葉が何を意味するのか知らなかったと？」

あるえー、逆効果！？

てかトレスキンさん僕の事全く信用してないし！

緊張と圧力で焦っていると、突然ミナが立ち上がったってトレスキンさんを正面から見据えた。

「その事については私が説明します」

「君がかね？」

「はい、私の知るすべてをお話します」

何を、と思つたら、ミナは僕に振り向いて微笑んでみせた。
小さく口が動く。

『だいじよぶ』

やっと僕はミナが何をするつもりなのか理解した。

ミナは、僕の代わりに矢面に立つてトレスキンさんから僕を守るつもりなんだ。

情けない。

自分自身の情けなさに反吐が出そうだ。

こんなにちっちゃい体で、僕を一生懸命守ろうとするミナに対して
申し訳無さや恥ずかしさが込み上げてくる。

握られた右手は、微かに震えている。

僕はミナに、ありがとって伝えたくて、左手できゅっと握り締め
た。

「ユーリは一週間前にこの国に来ました。前はユーリを拾って育て
てくれた人と、たった2人で暮らしていたそうです。だからユーリ
はこの国の常識や魔法や生活のちしきがありません。さつき受付で
お姉さんに言った事も、本当に知らなかったから出た言葉です。ユ
ーリは人をだましたり傷付けたりしない人です！」

「それはそれは。俄かにはとても信じられない話だがね」

「首都にある魔術師ギルドに、ナカシユという人がいます。その人に確認して下さい。ユーリのすじょうを知っている1人です」

ナカシユの名前が出た途端、トレスキンさんの眉間にシワが寄った。確認の為に姉さんに向かってよせよとしたのをミナが呼び止める。

「ユーリの事をたずねる時に、魔法付呪の事は言わないで下さい。ユーリを利用しようとする人がいるかもしれません」

その言葉で、ナカシユの上司の人を思い出した。

確かに僕が魔法付呪出来ると知ったら嬉々として乗り込んで来そう
だ。

でも僕は、そんな事は気にする事さえ出来なかった。

凜とした態度で僕を弁護してくれたミナに、心底見惚れていたんだ。真剣な横顔に、僕の為に言葉を紡ぐ姿に、冷静で回転の早い頭脳に、震えながらも退かない強い意志を感じさせる瞳に。

5分か10分か、それとも一瞬にも満たない時間か。

ミナに見惚れていた僕は、お姉さんが部屋に戻ってきた音で意識を取り戻した。

「確認しました。確かに、ミナさんの言う通りユーリさんは特殊な事情をお持ちのようです」

「そうか。……ミナさん、ユーリさん」

その声にびくつと震える僕達に、トレスキンさんは頭を下げた。

「疑ってしまい申し訳ありませんでした。確認の取れた今、正式に謝罪させて頂きたい」

「あ、頭を上げて下さい。僕もちよつと不注意でしたし」

「トレスキンさん、それならお願いがあります」

僕の言葉を遮って、ミナが口を開いた。

「これから起こる、他の人達がユーリにする行動への対策と一緒に考えてもらえますか？」

「それでしたら、是非お手伝いさせて頂きたいと思います」

振り返ったミナは僕の唇に指を当てる。

任せて、って目が語ってた。

その仕草に不思議と胸が高鳴る。

「ではユーリさん、貴方が付呪出来るのはどのような魔法ですか？」
「はっ、はいい！？あ、僕が知っている魔法はファイヤーとライブだけです」

思わず声が裏返っちゃった。

その反応にミナがクスクスと笑いを零す。

「知っている、というのは？」

「そのままの意味で……僕が聞いた事のある魔法はその2つだけなんです」

「ねえ、ユーリ君。今朝使ってたのは魔法じゃないの？」

突然、それまで黙っていたティス姉が口を開いた。

今朝使ってたって……あ、もしかして狼相手に実験してたの見られてた？

「あれは、なんて言うか……僕が勝手に創作したやつだから」

「は、創作!？」

「ユーリ、朝何かやってたの？」

「う、うん、昨日狼が出るかもって聞いたから実験をしてたんだ。髪の毛長くなってきてたから、ちょっと前髪切ったやつにファイヤ

ーと創作の追尾魔法を付呪して、狼を驚かせようとしたんだ」

「あ、それで前髪短くなってたんだ」

「い、いやいやっ!？2つも付呪とか普通じゃないから!？」

ものすごいティス姉が驚いている。

なんだろう、またフラグ立てた気がする。

せっかくだし、僕はここで付呪について整理してもらった。

基本的に付呪が出来る人は珍しく、ほとんどが王宮で働いている。

その理由は付呪したマジックアイテムを悪用されない為だったり、ライブの杖みたいな有用な品を安定して供給する為だったり、付呪出来る人を保護する為だったり。

付呪には専用の道具が必要で、魔力をかなり消耗するから付呪出来るのは1日に1個が限度だったりする。

更に付呪は1つの装具に1つの魔法しか組み込めない。

一番安価な発光の付呪でも、装具に付呪するだけで銀貨10枚、付呪された装具の相場は銀貨12枚だそう。

ライブの杖なんかは治療が目的だから銀貨2枚くらいで国が販売してるらしい。

こんな所かな？

魔法の創作うんぬんに関しては……発想と想像力を元にやったら偶然出来たって事にして誤魔化しておいた。

口の堅いギルドの人とはいえ、まだそこまで信用出来てないからね。取り敢えず僕の付呪に関しては、ライブだけ付呪出来るって事にして広める事で決まった。

下手に隠すよりは大っぴらにそこまですごくないって言った方が追求されないらしい。

それに攻撃系の付呪じゃなく治癒系の付呪なら、よからぬ人達に目を付けられにくいだろうって思惑もあるみたいだ。

ついでに僕の付呪行為に関してはギルド預かりにした。

僕への依頼はギルドを通して行う事で、余計なリスクを減らす為だ。そこまで話して、僕はやっと自分やミナがどれほどの危険に晒されているか気付いた。

一時話し合いを中断して、部屋を借りて誰も部屋に近付けないようにしてもらい、ミナを守る為の付呪を組み込む事にした。

「ミナ、何に付呪しようか？」

「ユーリがくれた、この指輪はどう？」

「うん、いいよ。ちょっと借りるね」

ミナから指輪を受け取り、思い付く限りの加護を与えていく。

耐熱、耐寒、耐衝撃、耐電、耐風、耐震、耐刃、耐弾、耐爆、耐毒、

耐煙、耐圧、耐水、耐音、耐霊、耐光、耐魔法、耐武器、耐臭……
そろそろ耐がゲシュタルト崩壊してきた。
他にもミナに対して悪意のあるもの、敵意のあるもの、害意のあるもの、健康を害するもの、怪我を負わせるもの、不快にさせるものなんかを弾くようにする。
真空、深海、高熱、低温等の人体に悪影響を及ぼす環境に対してもブロックするように調整。
効果範囲はミナの両手を広げたくらい。
言うなれば無敵バリヤーだ。
やり過ぎ？ミナの為なら何だってするさ！
完成した指輪をミナに返す。

「これで大丈夫だよ」

「ありがと、ユーリ」

「お風呂の時も外さなくていいように改良したんだ。試しに消えろって念じてごらん」

「んっ……お、消えたよユーリ！」

「出す時は出るって念じれば出るよ」

「お、便利だあ」

左手をにぎにぎして指輪を出したり消したりするミナ。

ようやく一安心して肺の空気を吐き出す。

これで誰もミナに手出しは出来ない。

誰にもミナを傷付けさせるもんか。

不意に頭を抱きかえられた。

顔を上げると、困ったような寂しいような、そんな笑みを浮かべたミナと目が合った。

「ユーリ、もうだいじょぶだよ。こわくない、こわくない　いいこ
いいこ」

「ミナ……?」

「だいじょぶだよ。私はどこにも行かない、ずっとユーリの側にい
るから。ユーリが私を守ってくれるみたいに、私もユーリを守るか
ら。だから、怖がらなくてもいいんだよ」

その言葉で、張り詰めていた糸が切れたような、そんな気持ちがあ
た。

ゆっくり、僕が抱え込んでたもやもやが溶けていく。

そっか、僕は怖がってたのか。

家族を失って、異世界に放り出されて。

ミナやシーナ、エアリイさんに出会って。

また人の優しさに触れて、離したくないって思って。

自分の不注意でミナを危険に晒して、ミナを失うかもしれないって
気付いて。

体から力がすんと抜ける。

「よしよし、いいこいいこ。落ち着くまで、こうしてるから」

小さな手が僕の頭を撫でる。

不思議と安らぎをくれる手に甘えて、しばらく僕はミナに抱き締め

てもらった。

ギルドで一悶着ありました。(後書き)

色々と難産でした。

最後の方は文体が混乱しています。

今回は後で黒歴史認定なお話になりそうです。

初めて、恋をしました。

ギルドでの付呪についての話し合いを終えて、僕とミナは宿屋へ帰ってきた。

色々とハートブレイクしてた情けない僕の代わりに、ミナがその辺の話を含めてくれた。

僕的能力を見極める為に5つ程ライブ 正確には自動回復を付呪した指輪を作り、その引き取りとこれからの仕事の手付け金として、金貨3枚を収入として得た。

庶民の1日の食費が銅貨15〜20枚だから……と、取り敢えずいっぱい食べられる額だ。

それと、あの後から部屋に戻るまで、ずっとミナに手を握ってもらっていたのは内緒だ。

さっきまでの幼児退行してた僕は黒歴史行きです。つていうか幼児退行多いな！

でもまあ、ミナに撫でてもらえるならたまには幼児退行もいいかもしれない。

ティス姉は気を使ってくれたのか、飲食街へと消えて行った。

去り際に「たらふく食うぞ〜」って言ってたけど……気を使ってくれたんだよね？

自信無くなってきた。

そして今、僕には新たな問題が。

問題っていうか、自分でもよく解らないんだけど。

ミナの顔が見れないつ。

部屋に戻って一休みしたら、何故かミナを正面から見れなくなって

た。

なんだかよく解らないけど、ミナと目が合うと息が苦しくなったり胸が苦しくなったりする。呼び掛けようとしても、

「み、ミナ……?」

「なあに、ユーリ?」

「あ、えっと……なんでもない」

胸が詰まって何も言えなくなる。なんでだろ?

ミナの指輪に付呪した効果が僕にまで影響してるのかな?理由は解らないけど、このままじゃまともにも会話も出来ない。どうしたもんかなって考えてたら、ミナの方から声を掛けてくれた。

「ねえユーリ、お腹空かない?」

「う、うん、そうだね。どっ、どこか食べに行こうか?」

ミナの声を聴くだけで心がふわふわ飛んでいきそうになる。普段ならすらすら言える言葉もつかえつつかえになって、最後の方は声が裏返ってた。

困惑する僕にミナが抱き付いてきた。

左腕を組まれ、くりくりとした愛らしい目が僕を見上げる。

「じゃあ行く、デートデート」

デート。

さつきは普通に口に出た言葉が、やけに特別なものを感じる。ほっぺ所か耳まで熱くなつて、僕は壊れた人形みたいに首をかくかくと振る事しか出来なかった。

ミナに腕を引かれ、部屋を出て飲食街へ向かう通りへ。

なんなんだ、このワクワク感は。

組んだ腕に伝わる温もりに3割、指を絡めるように繋いだ柔らかな手の感触に5割、立ち上る甘い香りに1割の意識を持ってかれる。

「おいし〜ね、これ」

「え、あ、うん」

知らない間に屋台で買い物していたみたいで、僕の手には鶏肉とレタスらしき野菜を挟んだパンのような料理が握られていた。かぶりつくと、白いピリ辛のソースが溢れ出す。

でも味は全然解らなかった。

もぐもぐと妖しく動くミナの唇は美味しいのかもしれない。

そんな事を考えてたら、ミナが僕に顔を寄せてきた。

長い睫毛も、澄んだ瞳も、美術品みたいにすごく綺麗な。ぺろり。

唇の端に、湿ったものが触れる。

「にへへ、おいし」

いたずらっ子みたいに笑うミナ。
何をされたのか理解した途端、急激に顔の温度が上がっていくのが解った。

いつ、今、僕の唇に、ぺ、ぺろって!?

あうあうと口をぱくぱくさせる僕の手を握って、ミナは歩き出した。慌てて横を歩きながら、味の解らないパンを口に押し込む。ふらふらと幾つかの露天を冷やかして、僕とミナはアクセサリーシヨップに入った。

ミナはキラキラした目で、猫の置物や食器を見つめる。

「わあ、かわいいねこれ」

「そ、そうだね」

正直見てなかった。

猫グッズにはしゃぐミナしか、僕の目に入らなかったからだ。

ぐるっと店内を見て回って、そろそろ出ようかと思って思った時に、それに出会った。

棚の端に置かれた小さな髪飾り。

かわいらしい花びらの部分に濃緑の宝石が飾られてあって、不思議と目が離せなくなった。

そんな僕の元に店員さんがやってくる。

「お気に召しました?」

「ええ、ミナに似合いそうだなって」

「元の花と宝石にはそれぞれ特別な意味が込められているので、贈り物として買われるお客様もいらっしやいます」

「特別な意味？」

「ええ、花言葉と宝石言葉とでも申しましょうか。それぞれ『純愛』と『献身』で、併せれば『私の気持ちを貴方に捧げる』と言った意味になります」

私の気持ちを貴方に捧げる……な、なんだか恥ずかしいな。

ミナにこれを贈ったら変な意味に取られないだろうか。

そんな葛藤を感じ取ったのか、店員さんは薄く笑って言った。

「日常の感謝として贈っても大丈夫ですよ。花言葉や宝石言葉は数多くありますし、普段から気にしている方は少ないですから」

「そ、そうですね。……じゃ、じゃあコレを下さい」

「お買い上げありがとうございます」

銀貨20枚を払って懐にしまう。

あ、でもコレいつ渡そう。

また1つ悩みが増えた瞬間だった。

その後もミナと2人で北の広場にある噴水で遊んだり、中央広場の教会を見学したり、色々と歩き回った。

笑ったり驚いたり、素敵な表情を見せてくれるミナ。

僕はチラチラとミナを見て、ミナが「なあに？」ってこっちを見たら慌てて視線を逸らして、しばらくしたらまたチラチラとミナを見ていた。
変に思われてなければいいなあ、って思ったけど、そんな僕を見てミナはクスクス笑っていた。

ああ、やっぱりミナはかわいいなあ。

日も傾いてきたから今日は散策終了。

宿屋に戻ってソファで寛いでいると、隣に座るミナが突然僕のほつぺをつつき始めた。

むにむにむに。

やわっこい人差し指の感触にドキドキしながら、目だけミナに向ける。

「じーっ」

なにやらすごい見られてた。

照れくさくなつて目を逸らしたら、回り込んで僕の目を見つめる。

さっと目を逸らす。

とてとて回り込むミナ。

目を逸らす。

とてとて。

さっ。

とてとて。

たわっ。

がしっ。
捕まりました。

な、なんだろう、怒らせるような事しちゃったかな？

恐る恐るミナの目を覗き込む。

そこには怒りの色は無く、ただ嬉しそうに僕を映す瞳があった。

綺麗な瞳に心を奪われて固まる僕。

さっきまで街の賑わいや鳥のさえずりが聞こえていたのに、今は痛いくらいに何も聞こえない。

時間が僕を置き去りにしたんじゃないかって思うくらい、僕の世界は止まってしまった。

『ッ』

音がした。

本当に小さな、音。

『ドッ』

知っている。

この音を、僕は知っている。

心臓の音だ。

『ッ、ドッ、ドッ』

胸元で、掌で、足先で、腰元で、耳の裏で、喉の奥で、或いは全身で。

僕の世界で1つだけ動きを止めずに、その存在を主張している。

『ドクッ、ドクッ、ドクッ』

音色は、まるで僕を急かすように。

うるさいくらいに鳴り響く鼓動が僕の体を支配していた。

『ドクンッ！ドクンッ！ドクンッ！』

目の前の女の子が、愛しい。

それしか考えられなかった僕は、そっと頬に添えられた手を外して立ち上がった。

「かつ、顔洗ってくるっ！」

そのまま一目散に部屋を飛び出した。

背後からはミナの「もうっ」「って呆れを含んだ、どこか嬉しそうな声が聞こえてくる。

帳簿を付けていた女将さん呼び止め、冷水を張った桶を用意してもらった。

宿屋の裏にあるこじんまりとした庭で頭から冷水を被る。

何度か冷水に頭を浴びせて、ようやく僕の思考も落ち着きを取り戻した。

まだ頬や耳は熱いけど、自分の気持ちに向き合うだけの余裕は生まれたみたい。

僕は、僕は。

「僕は……ミナに恋をしたんだ」

言葉にすると、スツと今までの感情を受け入れられた。

あのドキドキもふわふわも、全部ミナが好きだから。

顔を真っ直ぐ見られなかったのも、咲き誇る笑顔にずっと見惚れていたのも、触れ合った手を離したくないって思ったのも、全部。

「……よしっ」

懐にしまった髪飾りを撫でる。

まだドキドキは残ってるけど、このドキドキも全部ミナにぶつけてやるんだ！

結果なんて、今はどうでもいい。

僕がミナを好きだって気持ち、全部伝えたい。

宿屋に戻ると、びしょ濡れの僕を見て女将さんはニヤツと口の端を

吊り上げた。

女将さんは何も言わずに、背中をバシッと叩いた。

お礼を言っただ階段を駆け上がる。

ほんのちよつとの距離なのに、ミナの待つ部屋がすごく遠くに感じる。

廊下を駆け抜け、勢いよく扉を開け放った。

「ユーリ、わ、どうしたの!？」

びしょ濡れの僕に目を丸くする。

タオルを取りに洗面所へ向かおうとするのを制して、僕はお姫様に片膝を着く。

僕の行動に混乱するミナに、僕は自分の気持ちをぶつけた。

「ミナ、僕の話聞いて欲しい」

「な、何、ユーリ?」

「僕は……僕は、ミナが好きだ!」

突然の告白に再度目を丸くするミナ。

構わず、僕は言葉を続けた。

「今日、やっと解ったんだ。どこへ行っても、何をしても、僕はずっとミナを追っていた。ミナ笑顔が見る為ならなんだってする、ミナが喜んでくれるならどんな事でもしてあげたい。もし僕がお爺さんになっても、ミナが隣で笑っていてくれれば、後は何もいらな

い。僕はミナの事が好きだ、大好きだ！ミナ、僕と　僕と結婚を前提に付き合って下さい！」

懐から取り出した髪飾りを、ミナへ差し出した。

言い切るのと同時に頭を下げたから、ミナの表情は解らない。

1分か2分か、30分か10秒か。

時間の感覚が無くなっている僕は、永遠に近い時間が過ぎ去ったように思えた。

もしかしたら、ミナは髪飾りを受け取ってくれないかもしれないかもしれない。

そんな暗い、泣き叫びたくなるような不安が胸を横切ろうとした瞬間、僕の手は温かいものに包まれた。

見なくても解る、優しい小さな手。

弾かれたように顔を上げると、満面の笑みを浮かべたミナが、そこに立っていた。

頬には一筋の光が伝っている。

髪飾りを受け取ったミナは、そのまま僕に抱き付いて言った。

「ユーリのバカ、バカバカばあか」

「ゴメン」

「そこで謝るユーリはもつとおバカ。私は逢った時から、ユーリの事を好きって解ってたのに」

「ゴメン」

「ゆるしてあげないもん、ユーリと結婚して、たくさん子供産んで、

「ユーリがおじいちゃんになって死ぬ時までゆるしてあげないもん」
「うん」

「でもユーリが死んだら悲しいから、やっぱりゆるしてあげない」

「じゃあ、生まれ変わったらまた、ミナに逢いに行くよ」

「逢いに来るだけ？」

「まさか。もう一度言うんだ、僕と結婚して下さいって」

「ユーリを待ってたら、私おばあちゃんかもしれないよ？」

「構わないよ。ミナがおばあちゃんだったら最期の時まで側にいて看送ってあげる。その後、生まれ変わったミナを探し出して、大きくなるまで待って、もう一度告白する」

「なら、ゆるしてあげる」

少し体を離して、目を閉じて僕を見上げるミナ。

その柔らかな唇に、僕の唇を重ねた。

今日僕に、優しくてかわいくて小さな　世界一のお嫁さんが出来た。

夢見心地だった僕達を現実に戻したのは、背後で起きたドタバタという何かが倒れる音。

びっくりして振り返ると、数人の若い女性や女の子がひしめき合って床に倒れていた。

一番下で潰れていたのはなんと宿屋の娘さん。

なんでもびしょ濡れになった僕を見掛けて女将さんに訳を聴いたら居ても立ってもいらねず、仕事を放り出して覗き見していたらしい。

それを見た他の宿泊客や従業員が集まっていたの間にか出歯亀タワ
ーが。

廊下には更に多くの人が困ったように笑いながら立っていた。

……どうやら僕の一世代の告白は宿屋中に響き渡っていたっぽい。
恥ずかしくて固まっていると、娘さんの頭に女将さんがげんこつを
振り下ろした。

うわ、ごいんって音したよ！？女将さんは僕達に頭を下げると、謝
罪も込みで僕とミナの結婚祝いを一足先にやろう、と提案してくれ
た。

その日の夕食はすごく豪華で賑やかなものになった。

こうして、僕の仕事初日は笑顔と祝福に包まれながら過ぎて行きま
したとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486x/>

起きたら異世界でした。

2011年11月16日08時07分発行